

42989

教科書文庫

4
220
42-1941
20000
71961

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

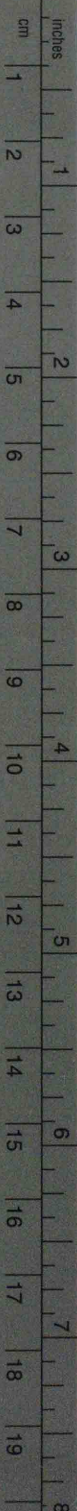


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科
42-
2000

育 教 子 女

史 洋 東 編 新

(用 校 學 女 等 高)

士 博 學 文
著 郎 四 久 山 中

據 準 目 要 授 教 新



資料室濟定檢省部文

日五十月二十年六十和昭
用科史歷校學女等高

教科書文庫
4
220
42-1941
2000071961

育教子女 史洋東編新

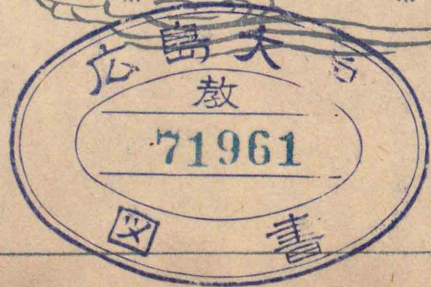
(用校學女等高)

授教學大科理文京東

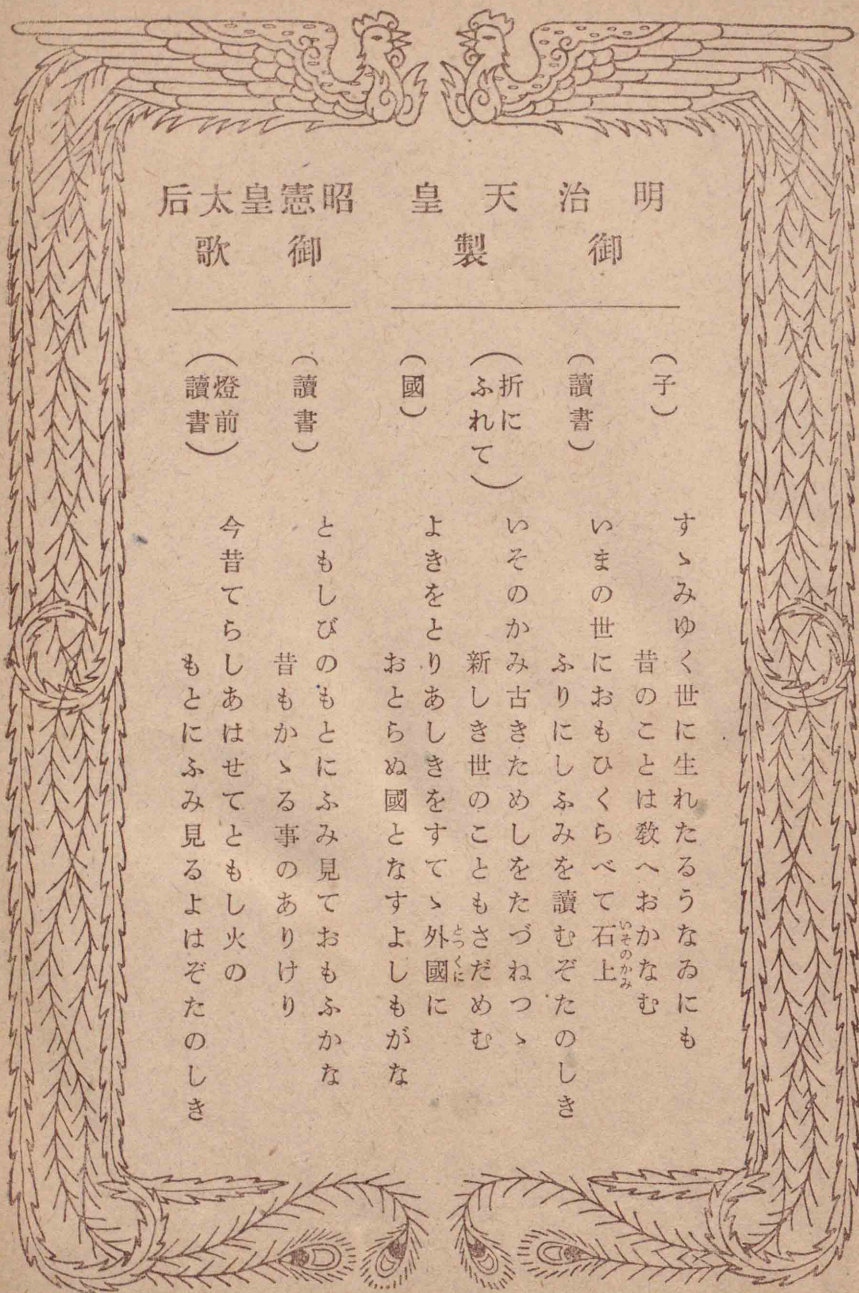
士博學文

著郎四久山中

據準目要授教新



46
220
B216



明治天皇 昭憲皇太后
御製 御歌

(子)

すゝみゆく世に生れたるうなるにも

(讀書)

昔のことは教へおかなむ

(折にふれて)

いまの世におもひくらべて石上いそのかみ

ふりにしふみを讀むぞたのしき

(國)

いそのかみ古きためしをたづねつゝ

よきをとりあしきをすてゝ外國とくにに

(讀書)

おとらぬ國となすよしもがな

(燈前讀書)

ともしびのもとにふみ見ておもふかな

昔もかゝる事のありけり

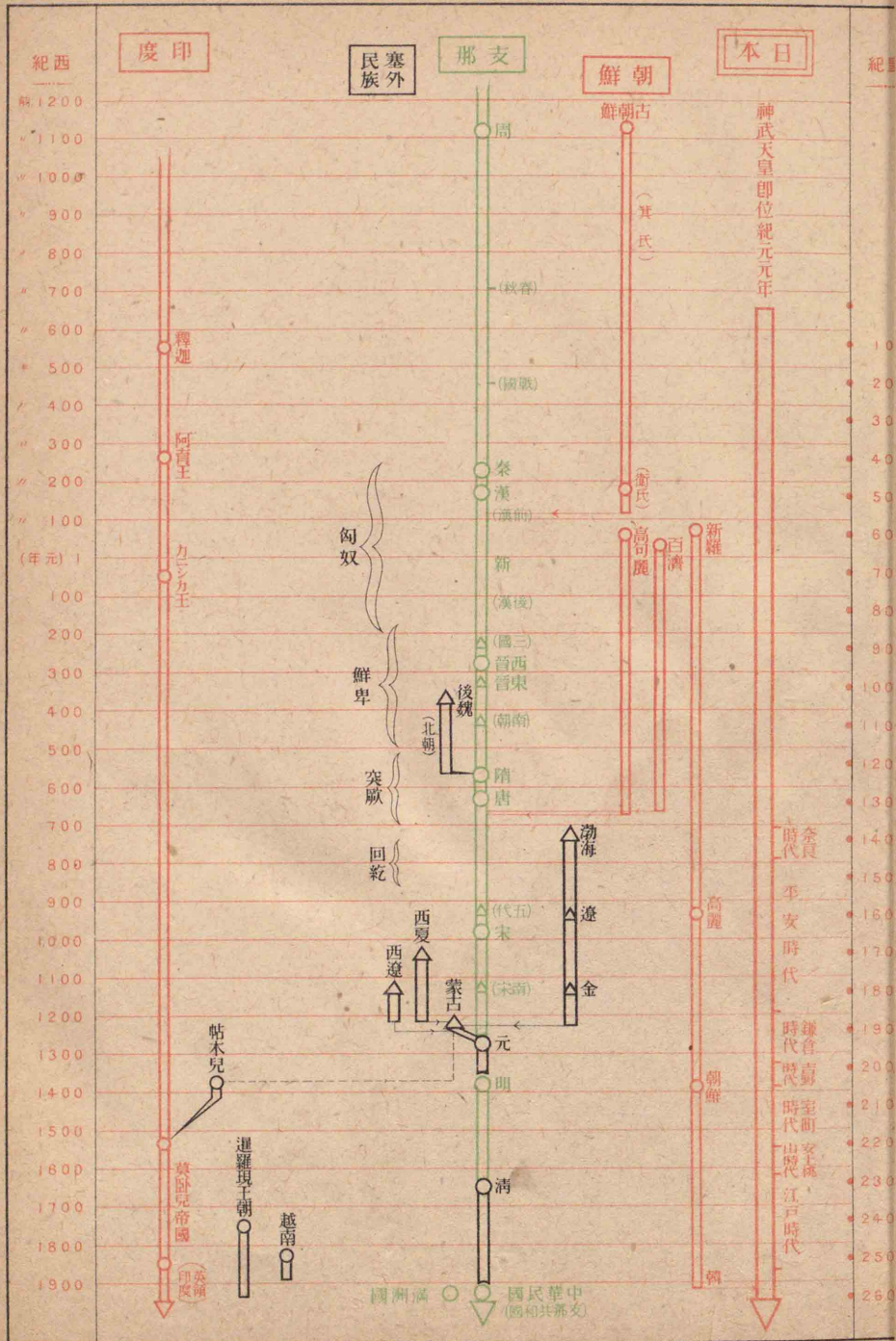
今昔てらしあはせてともし火の

もとにふみ見るよはぞたのしき

史記東漢

広島大学図書
2000071961
Barcode

東洋史諸國總覽略表



支那は周より始まるにあらず。周より約一千五百年以上の古史傳を有せれども、紙幅の關係上しほく周以前を省略するものとす。印度の太古も亦本表以前に起るものと知るべし。

例言

一、本書は、高等女學校に於ける外國史(東洋史)の教科書として著述したものであります。

一、本書各章の目次は、昭和十二年三月二十七日改正公布の文部省所定の高等女學校歴史教授要目に準據ジュンキョしたものであります。

一、本書の記事は平易ヘイイを主とし、事實の連絡に注意し、逸話イムワ・傳説及び和歌を附録し、また多くの圖畫をのせて讀者の理解を助け、感興カンキョウを増さしめることに努めました。なほ一般史實の中、道德的教材と文化史的教材と女性史實教材の記述には特に注意したつもりであります。

一、本書中の紀年は、皇紀を本として、既に修めたる國史との關係を保たせることをはかり、且つ重要な紀年には、我が歷朝の御諡、又は將軍・執權等の名を併せ記しました。但し明治以後に起つた事實には、便宜上明治以後の年

敷を記しました。また東洋史は西洋史と相ならんで外國史の一半をなすものであるから、便宜上西洋紀元をも附記したところもあります。

一、本書の處々に歴代の系譜の主なものを載せ、卷末には、沿革摘要の年表を掲げ、また歴史地圖を附加しました。讀者は是非之を参照せられたい。

一、以上の諸點は、著者の聊か注意した所でありますが、史料の選擇・排列及び文辭、その他の點についてなほ缺點がありませう。大方の諸氏より示教を賜はらば、ひとり著者の幸のみではなからうと思ひます。

皇紀二千五百九十七年

昭和十二年七月十二日

中山久四郎識す

女子教育 新編東洋史

目次

第一章	東洋史の意義	一
第二章	上代の支那及び印度	三
第三章	秦・漢時代	一三
第四章	三國・兩晉・南北朝時代	二四
第五章	隋・唐時代	三三
第六章	五代・宋時代	四三
第七章	元時代	四九
第八章	明時代	五三
第九章	清時代	六一

第十章 歐米諸國のアジャ経略……………六五

第十一章 清の末路と中華民國……………七五

第十二章 滿洲帝國……………八五

第十三章 現代の東洋……………九〇

第十四章 東洋史上より觀たる我が國の使命と國民の覺悟……………九六

〔歷代地圖〕

第一圖

- 一 亞細亞地勢略圖
- 二 周代以前要地圖
- 三 春秋時代要圖
- 四 戰國時代略圖
- 五 古朝鮮略圖
- 六 印度古代佛教靈場並に亞歷山大王遠征行路略圖

第二圖

- 一 漢代亞細亞圖
- 二 漢・楚分爭圖
- 三 三國鼎立圖

第三圖

- 一 唐代亞細亞圖
- 二 北宋・遼・西夏對立圖

●南宋・金・西夏對立時代圖

第四圖

●元代亞細亞圖

●元代版圖擴張圖

第五圖

●明代亞細亞圖

●清初亞細亞圖

●清初滿洲圖

第六圖

●現代亞細亞圖

●露國中央亞細亞侵略圖

●露國極東侵略圖

●佛國印度支那侵略圖

目次終

女子教育新編東洋史

文學博士 中山久四郎著

第一章 東洋史の意義

●東洋史上の地と人と 私共はこれより支那を中心とする東洋諸國の歴史を學びます。支那及び印度などの東洋史上の諸國は、我が國と同じく廣い意義の東洋にあつて、漢民族印度民族などがそこにあらはれて、幾多の國を立て、いろくの事業をなし、さまざまの文化を造つて、世界の進歩に貢獻し、また昔より我が國と交通して、文化上の關係が深いのみでなく、現代の國際上の關係も、また極めて深く、その諸國の沿革と文化の由來や性質を知ることが、我が

禪讓

國民にとつて甚だ大切であり、國史を明らかにするためにも、大いに有益な参考となるものであります。

● 國體の相異 さて既に國史を學んだものが、今より外國史を學ぶこととなつたのにつけて、特に注意すべきことがあります。それは我が日本と外國との大きな相異の點であります。

我が國はいふまでもなく、肇國以來君臣の名分が一定し、萬世一系の天皇を奉戴する正大尊嚴なる國體の國であります。

しかるに、支那その他の諸外國は、昔よりしばしば主權者の革命が起り、その國號もたび／＼かはりました。

我が國と諸外國とは、かやうに國體に大きな相異のあることは、外國史を學ぶにつけて、第一に心得ておくべきことであります。

● 歴史の意味 歴史は、まづ演劇のやうなものであります。その土地は舞臺で、その土地にあらはれてゐる／＼な業績を遺した人種

地人の關係

人と時と處
因果と影響

民族は、役者にたとへられます。又歴史の意義を簡單にいへば、何時誰が何處で何事をなしたかといふことを明らかにするもので、即ち人と時と處の三つが大切であります。やゝ精しくいふと、その出來事の原因結果及び影響などを明らかにしなければなりません。

第二章 上代の支那及び印度

第一節 上代の支那

● 支那建國の初め さて支那の歴史の舞臺は後には甚だ廣くなつたが、初めは北支那の黄河の流域の一部分でありました。またその役者も多くあつたが、その主人役ともいふべきものは、漢民族であります。漢民族が何時何處から來たかといふことは、今なほ明らかでありませんが、今より約五千年前に支那に入り、黄河のほとりに住み、多くの部落をなしてゐたといひ、黄帝といふ英雄が出て之

漢民族

黄帝

堯・舜二帝

二十四孝の第一

禹の治水

*皇紀前一〇〇〇頃、西紀前一七六〇頃

革命の始め
桀・紂二王

*皇紀前四六〇頃、西紀前一二二〇頃

を統一し、始めて舟車を作り、音楽を定め、文字を製し、また養蠶サシを始めたさうです。その後堯舜二帝相ついで出で、よく天下を治め、聖天子として後の人に尊ばれました。

帝舜は孝行の人で、支那の二十四孝の第一として名高い。支那は昔から孝を重んじ、孝は百行の本といはれてゐるほどであります。

①夏の世 堯舜の世に、黄河の洪水があり、人民が大いに苦しみました。禹は治水に成功し、帝舜について天子となり、國を夏と號しました。堯舜二帝及び禹王はともに今の山西省内に都しました。

禹の崩後、其の子啓ついで王となり、王位の世襲がこゝに始まり、其の後桀王に至り、惡政を行つたので殷の湯王に滅マされました。

②殷の世 湯王より六百年ばかりたつて、紂王に至り、また惡政を行つたので、周の武王に滅マされました。その末路は、まことに前代に似てをります。斯の如く支那は上古から王朝の革命があつて、これ

和漢(日支)の國體の相異

文・武二王と周初の良母賢妻

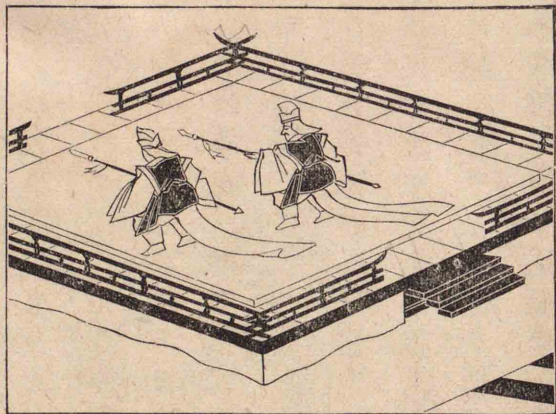
封建制度

伯夷・叔齊の清節

が萬世一系の我が國體と大いに異なる所であります。

④周の盛衰 周の武王の父文王は、殷末の大諸侯で、善政を行ひ人望がありました。文王の母太任と王妃太姒は、ともに婦徳高き人で、文武二王は善良な家庭に養はれました。武王は殷に代つた後、今の長安(陝西)の西に都し、一族功臣を封じて諸侯とし、公侯伯子男の五爵を設けました。

殷・周革命の際、伯夷・叔齊といふ二義人がありました。武王出陣の時、臣として君をうつ不正を諫めたがきかれず、天下既に周の世となるや、周につかへることを恥ぢて、山に入り蕨をとり、終に餓死したといひ傳へられ、その清く且つ堅い節操セウサウは後世に名高いものであります。



武王の勝禱の狀をなせ舞樂圖の時の

周公の輔佐

*皇紀前一〇〇、
西紀前七七〇
周の東遷と西周
及び東周

尊王攘夷

五霸の第一



周成公王を輔くる圖

武王の死後、その弟周公は幼主成王(武王の子)を輔タスけてます。善政を行ひ、天下よく治まり、文化も次第に進みました。成王の後、數世を経て王威漸シく衰へ、第十二世の幽王は、西方の異民族に攻め殺され、その子平王はこれを恐れて、東フの方洛邑(河南省)に遷りました。之を周の東遷トといひ、東遷の前後によつて周を西周・東周の二つに分けます。

●春秋五霸 周の東遷の後、約三百年間を春秋の世といひます。この間、周の王室はますます衰へ、諸侯は互に相争ひ、夷狄がしばしば侵入しました。よつて有力な諸侯は、尊王攘夷シヤウイを名とし、王命をかりて、小諸侯に號令しました。之を覇者クワンテウといひ、五霸ありましたが、齊セイの桓公クワンが最も名高く、その名臣管仲クワンテウを用

ひて覇業に成功しました。桓公の時は、我が神武天皇即位紀元前後の頃であります。

管仲は春秋時代第一の政治家で、よく富と教、又は經濟と道德の關係に注意して、「倉廩クラウ倉庫ク實ちて禮節を知り、衣食足りて榮辱を知る。」といふ政策を守りました。

●戦國七雄 春秋の後、二百年ばかりの間を戦國の世といひます。この間、春秋時代の諸侯の數が減少して、秦・楚・齊・燕・韓・魏・趙の七大國の君は自ら王と稱して、周王は尊嚴を失ひ、七國互に競争しました。その中西方の秦は最も強く、東方の六國に迫らんとする勢がありました。



古代支那戦士の圖 (後漢時代彫刻の山東省武梁室圖像)

經濟と道德

戦國時代

遠交近攻の策

*皇紀四一二、孝
靈天皇御代、西
紀前二四九

秦の統一

周(三十八世八
百七十四年) 西周(三百五十二年)

春秋の世(約三百
年間) 東周(五百二十二年)
戦國の世(約二百
年間)

ました。そこで六國同盟の策がたてられました。秦も努力して六國の連合を破り、且つ遠交近攻の策を立てて、次第に六國を弱め、遂に周を滅し、秦王政に至り、盡く六國を滅して、天下を統一しました。

父母兄弟子の五教

學術の根と芽と花

七 教育・學術

支那の教育の始めは、堯舜の頃にあつて、帝舜は、父は義、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝といふ五教を明らかにして、國民に教へ、夏殷周の三代には各學校の制度がありました。かくて支那古代の學術は、堯舜の頃にその根をうる、夏殷の世に芽を出し、周に至つては花を開いて美を競ふといふべきで、春秋戰國の世は亂世でありましたけれども、また一方には道を説いて、天下を平和ならしめようとするものもあらはれ、且つ列國ともに人材を招いたので、

學者論客競ひ起り、互に世を救ひ身を立てんことを力めました。その中最も名高いのは聖人孔子であります。

六 孔子

孔子(名は丘、字は仲尼)

は春秋時代の末、魯(周公の封國)に生れ、學徳の高

*皇紀一〇九、綏
靖天皇御代、西
紀前五五二
孔子の學徳・趣味及び意志

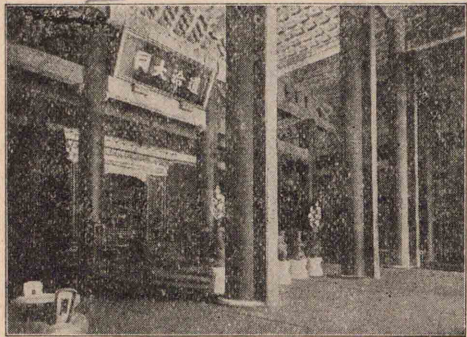
儒教

正しい政治即ち
道徳による政治

孟子
孔子

儒教
儒教

論語の傳來



北成大京殿(正位)孔子神位前の間偏額
「道治大同」の四字は國民六年大總統黎洪元の題字なり

いのと共に、音樂の趣味も人に優り、その意志極めて強く、義を見てなさはるは勇なきなり。と申しました。儒教は孔子の大成した道徳教で、政は正なりと説き、仁を以て修身治國の本とし、仁の最上徳に達するには孝悌の道より始むべしと教へました。その後、戰國の世に孟子が出て、孔子の道を弘め、儒教を孔孟の道といふやうになりました。

孔子の師弟及び孔子と時人の問答などを輯めた論語は、我が應神

天皇の時、百濟の王仁ワニがこれを本邦に傳へました。これは日本歴史で學んだとほりであります（孔子の歿後約七百六十年）。

孔子

かみつ世のかしこき人をのりとして立てし教へぞ今も朽せぬ
あめの下めぐりつくして萬代の道の親ともなりしきみかな

東久世通禧
税所敦子

孟母三遷の教

孟母斷機の教

孟子の母は有名な賢母でありました。その家は初め墓地に近く、孟子は遊戯にも葬式のまねをしましたので、母は善い住處でないとして、商家の傍に移り、更に學校の傍に遷りました。之を孟母三遷の教といひます。又孟子の少時、讀書中母は機織をしてゐましたが、孟子の讀書を中止するや、母は刀を以てその織物を斷ちきり、學問の中止すべからざるを諭しました。之を孟母斷機の教といひます。

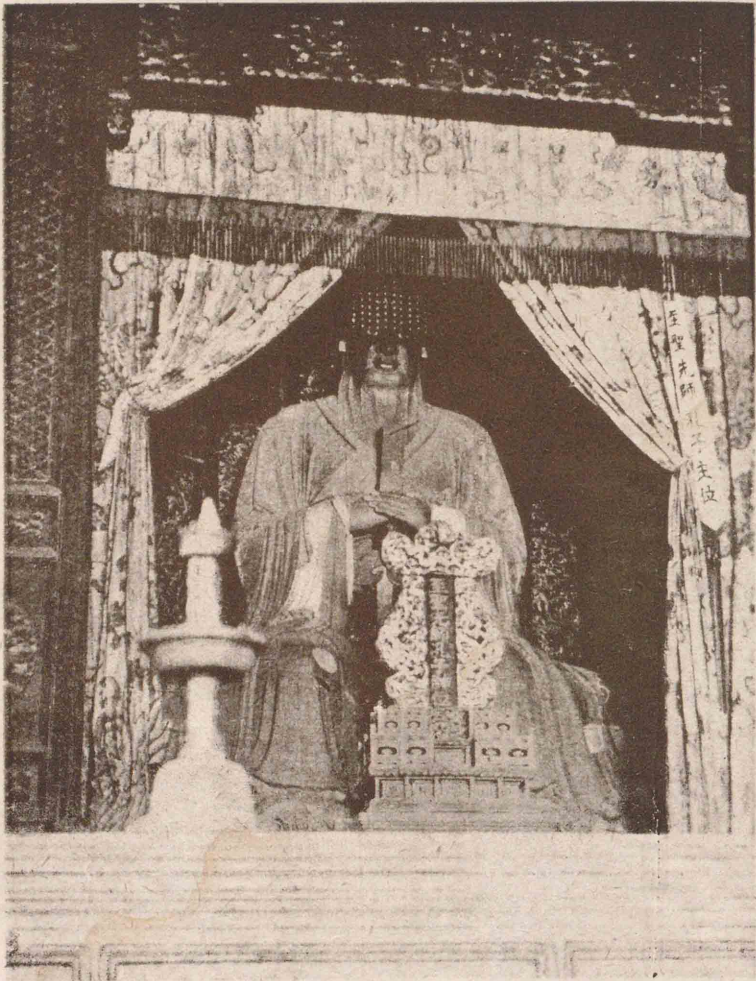
孟母

心して遷しうゑずばなでしこの花も千とせににほはざらまし
たちちねの子のため斷ちしし織ややがて心の錦なるらん

黒田清綱
税所敦子

孟子の著した書物を孟子といひ、論語及び大學中庸と併せて、之を四書といひ、儒教の大切な古典として、我が國に於ても昔からよく行はれ、大いに國民道德の發達に役立ちました。

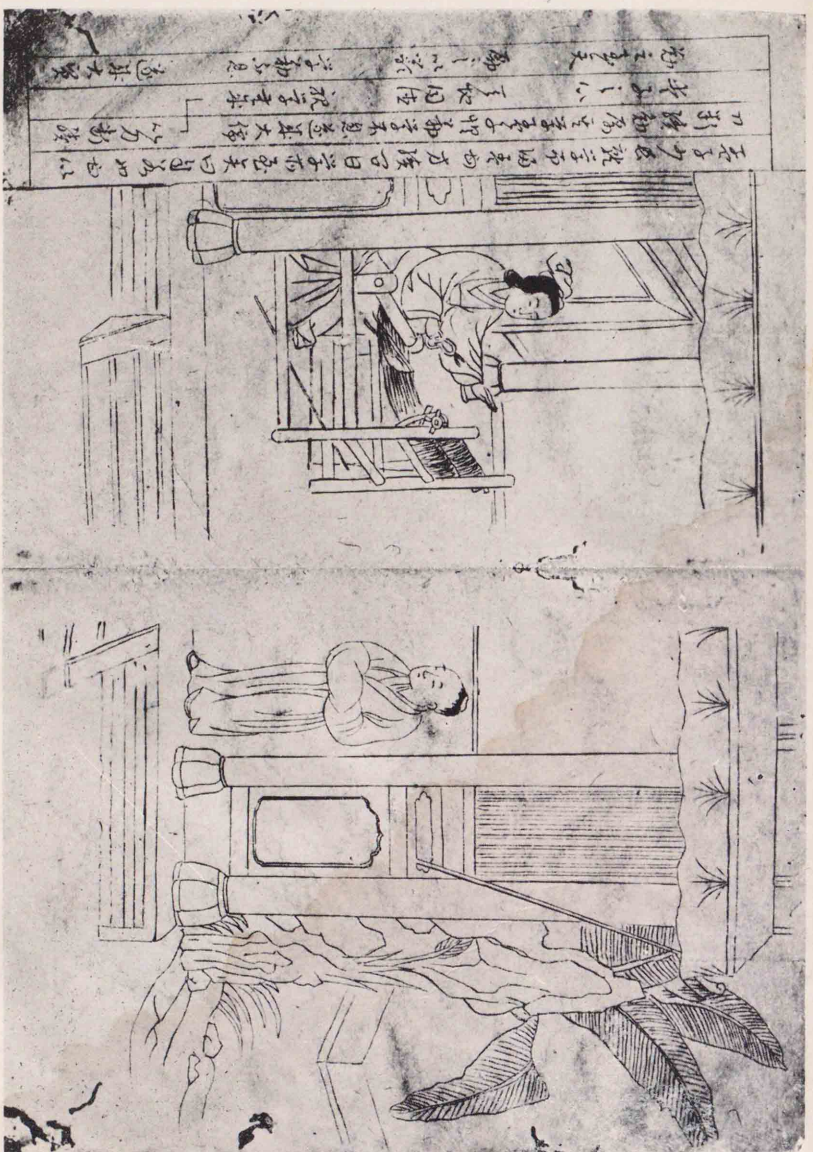
四書と我が國民道德



孔子の像

孔子の像

この像は山東省曲阜縣城内にある大成殿(孔子を祭る殿堂)に安置されてあるもので、東魏の興和年中(今より大約一千四百年前)に作つたものとして傳へられてゐる。



孟 母 斷 機 の 圖

孟母斷機の圖

これは支那の明代に編輯された孟子全圖孟子全圖に孟子繪本孟子繪本にのせてある孟母斷機の繪をうつしたものであります。

孔孟と老莊
道家より道教

諸子百家

印度の四種姓

●九 諸子百家 儒教の孔孟二子が道德や禮樂を重んずるのに對して、老子や莊子は、反動的に自然無爲の道を説きました。この一派を道家といひ、儒教と共に世に行はれ、後世の道教は、この派の說によつてつくり出されたのであります。その他、いろくくの學派がならび起り、これ等を總稱して諸子百家といひ、後世の支那の思想文學は多くこれより流れ出てゐます。

第二節 上代の印度

●一 上代印度 亞細亞大陸の南方に印度といふ大半島があります。印度は支那とともに世界の舊國の一つで、また東洋文化の一發源地であります。今より四千餘年前にアフリヤ人種Avansの一派は、中央亞細亞から南に下つて印度に入り、やがてその國民は、僧族王族平民Brahmanism、奴隸の四種姓に分れました。當時の宗教は、ブラーマン教といひ、四

衆生の希望

種姓の階級があつて、僧族の特権を認めましたから、僧族はつひに勢力を得て、他の三階級はその壓制に苦しみ、世を救ふ聖人が出て、宗教を革新せんことを希望してゐました。

世界三聖の一

① ② 佛教の興起 この時に當り、世界三大聖人の一人たる釋迦が

*皇紀九七頃、綏靖天皇御代、西紀前五六四頃に誕生。孔子と殆ど同代なり

釋迦牟尼

て世を救ひ佛教を開きました。釋迦の本名は悉達といひ、中印度カピラ國王の王子として生れましたが、衆生を濟度しようといふ尊い理想を立て、難行苦學を積んで、つひに釋迦牟尼と尊稱され、佛教を創め、一切平等を説き、慈悲博愛を行ふべきことを教へました。そこでこれまで苦しんで居たものは、皆喜んでこの新しい宗教に歸依しました。

*支那の戰國の末の頃

阿育王の熱心

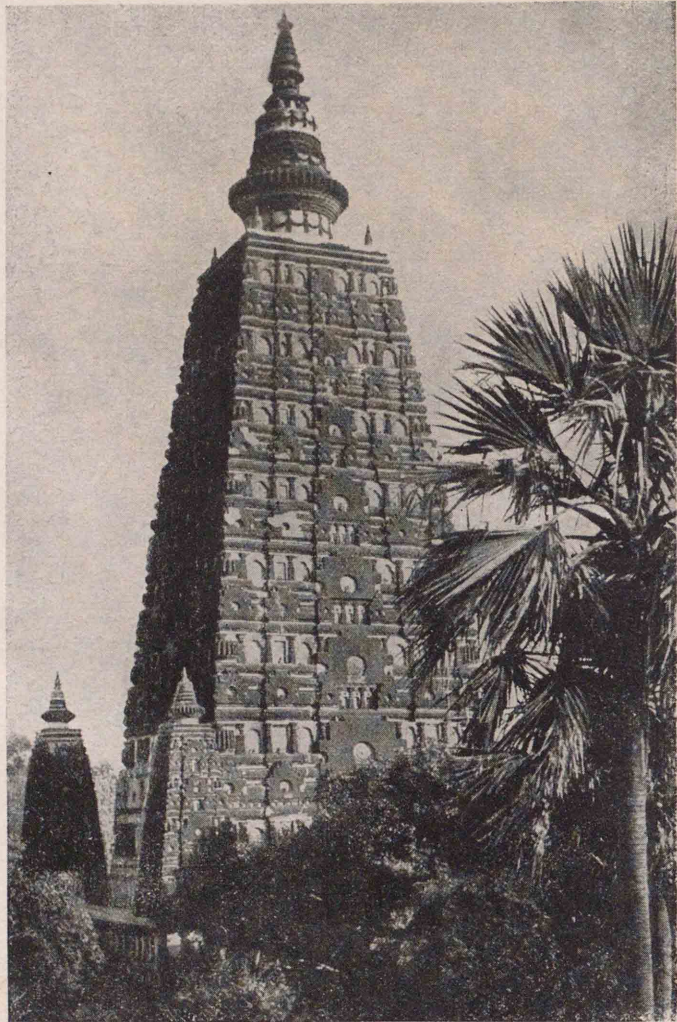
その後、二百餘年を経て、中印度のマガダ國に阿育王が出て、深く佛教を信じ、その傳播に熱心であつたので、佛教は盛に行はれ、印度よりの外の諸國にも弘まるやうになりました。



釋迦圖

(藏寺福東都京)

(筆玄道吳の唐傳)



釋尊大悟成佛の靈場の高塔

釋、迦、圖

支那の唐の世、文物大に興り、圖書の術も頗る發展した。吳道玄は唐の諸大家の一人で、字は道子といひ、吳道子の名によつて知られてゐる。玄宗時代の人。人物畫に長じ、佛寺等の壁畫を作つたので名高い。本圖は、京都東福寺に藏められ、吳道玄の筆と傳へられてゐる。

釋尊・大悟・成佛の靈場

この靈場は、今の印度のベンガル州のガヤ市の南方三里許の佛陀迦耶 (Buddha-Gaya) にある。釋尊の靈場は印度に多いけれども、これが第一である。釋尊は此靈場の菩提樹下の金剛座に端坐し、沈思默念の末、大悟して佛陀となられた。圖中の高塔は此古蹟に建立したもので、其起源は遠く二千一百餘年前の阿育王(釋尊死後二百年許)の時にあつて、近世緬甸王及び英國人の修復再興したものである。高さ百七十尺許、基址の一辺五十尺許である。因みにいふ釋尊・大悟の時は其年三十五歳の二月八日、四月八日は釋尊の誕生日なりと傳へられてゐる。

釋迦もまたあみだももとは人ぞかし我も形は人にあらずや
一 休和尙

第三章 秦・漢時代

第一節 秦・漢の興亡

● 秦の始皇帝 秦王政は天下統一の後、自ら始皇帝と稱し、制度を改め、周の世の封建の制を廢して、郡縣の制となし、國都咸陽(陝西)に壯大な宮殿を築き、大いに中央集權の政を行ひました。皇帝といふ尊稱も、始皇帝に始まつたのであります。帝はまた戰國以來しばしば支那に侵入した匈奴といふ北狄を撃ち破り、且つ北邊に萬里の長城を増築し、南は今の安南地方まで征服しました。されば秦の威名遠く振ひ、諸外國は秦の名を訛つて支那と呼ぶやうになりました。かくて帝の内外の事業は盛大であつたが、その政治が甚だ厳しく、且つあらかつたので、これを非難するものがありました。

● 秦の滅亡 帝の死後、その子二世皇帝の世となるや、叛亂を起す

中央集權の政

皇帝尊稱の始め

萬里の長城

支那國號の起源

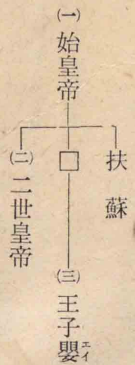
項・劉二雄

*皇紀四五五、
元天皇御代、西
紀前二〇六
理想の幻滅

もの多く、中にも江東(省江蘇)に起つた項羽と沛(省江蘇)に起つた劉邦とは、最も有力な英雄で、共に秦を攻め、劉邦まづ咸陽を陥れて、秦を滅しました。かくて始皇帝が二世三世とかぞへて、萬世に至り、之を無窮に傳へん」と大言した秦の天下も、始皇帝の死後僅に三年にして亡びました。

我が應神天皇の御代、秦の後と稱するものが朝鮮より歸化し、秦氏となり、蠶織などの方面にはたらいて功績がありました。

秦の系圖



漢の三傑

漢の高祖 秦の亡んだ後、劉邦と項羽は、兩雄並び立たずの諺にもれず、互に天下を争つたが、劉邦は蕭何・張良・韓信の三傑を善用し

*皇紀四五九、
元天皇御代、西
紀前二〇二

漢土・漢人



漢の高祖(晩笑堂畫傳)

て、項羽を滅し、自ら帝位に即き、長安(省陝西)に都しました。これが即ち漢の高祖であります。高祖は實に一平民より起つて天子となつた英雄であります。漢王朝は、多年支那を治めて、支那帝國成立の基を固め、漢土及び漢人の名は、つひに支那及び支那人の別名となりました。

漢初の良君

文帝・景帝 高祖の死後、惠帝を経て、第三世の文帝は仁愛儉約の良君として名高く、その子景帝の時も概して天下よく治まり、人民も富み國庫も豊となりました。

武帝の諡

武帝の功業 景帝の子武帝は雄才大略があつて、前代豊富の後をうけて位につき、在位五十四年の久しきに及び、内治外交ともに大いに振ひ、特にその諡の示すが如く外征の武功にあらはれてゐ

箕子と朝鮮

*皇紀五五三、開
化天皇御代、西
紀前一〇八
四郡と三韓
和・韓・漢三土の
交通

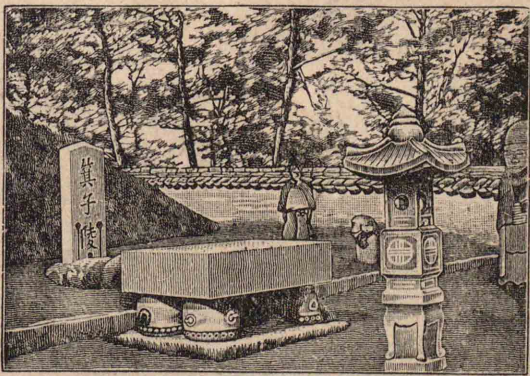
北方の匈奴と南
方の支那

祖先と民族の爲
の出兵

ます。

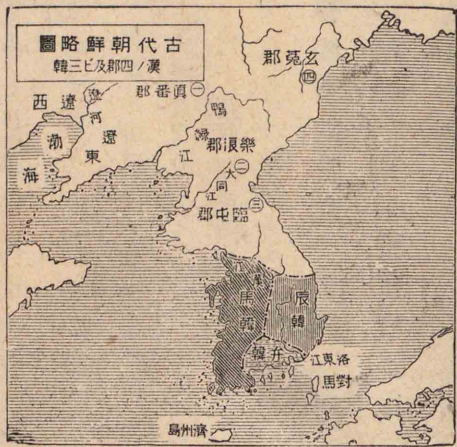
⑥ 古朝鮮 古朝鮮は、周の初めに殷の王族箕子の建てた國であります。

箕氏は古朝鮮の君たること、九百餘年、漢の初めに至り、燕の人衛滿が箕氏に代つて朝鮮王となりましたが、武帝は衛滿の孫を滅して、その地を漢の四郡としました。時に半島の南部は、馬韓・辰韓・弁韓の三大部に分れ、早くから本邦と通じてゐましたので、本邦及び三韓と漢との交通も亦従つて開けました。



(壤平鮮朝) 陵の子箕

⑦ 匈奴 當時北方の匈奴は支那の大敵で、漢の高祖も親征して失敗しました。よつて武帝は匈奴を撃ちはらつて、祖先と民族の恥を雪がんとし、しばしば兵を出して、之を撃ち破りました。この匈奴征伐と關係してゐる西域征伐のことは後にゆづります。



古 代 朝 鮮 朝 略 圖

*皇紀六六八、
仁天皇御代、西
紀八

漢の勢力範圍

新の國運僅に十
五年
*皇紀六九六、
仁天皇御代、西
紀三六

を新と號し、漢は一時中絶しました。

⑨ 漢の再興 されど、人心は未だ漢を去らないのみならず、王莽の政治が良くなかつたので不平の群雄は四方に起り、王莽は忽ち敗れ、群雄中、漢の王族劉秀は衆に推されて天子となり、洛陽(周の)に都し、群雄を平定して、天下を一統しました。漢は一時の中絶によつて

前漢と後漢

前後兩漢に分れ、劉秀は即ち後漢の光武帝と呼ばれます。

④ 後漢の盛衰 光武帝は専ら平和主義をとり、且つ節義の奨励を以て名高い。その子明帝、孫章帝も亦よく父祖の業をつぎ、漢の國運また盛となりました。

されど、第四世の和帝以後の諸帝、多くは幼弱で、政治は次第に悪化しましたので、節義を重んずる諸名士は、その弊害を除かうとして成らず、反つて種々の不幸にあひました。

諸名士の禍

楊震の四知

楊震は後漢の一名士で、正直を以て名高い。かつて郡守となるや、ある夜、人あり金を贈り、夜中知る者なしといつて、金を受けるやうに勧めましたが、楊震は、「天知、地知、子知、我知、何謂無知」といつてこれをしりぞけました。これを楊震の四知と云つて有名な話であります。

⑤ 後漢の滅亡 後漢は諸名士の不幸によつて、政治ますます衰へ、人心漸く亂を思ひ、賊徒諸方に起りました。是に於て或は賊を討ち、或は政治を改善するを名として、群雄相ついで起り、天下また亂世

*皇紀八六八、應
神天皇御代

赤壁の戰

*皇紀八八〇、應
神天皇御代、西
紀二二〇

漢朝四百年

となりました。中にも曹操の勢特に強く、漢の王族である劉備及び江南の豪族孫權の聯合軍と赤壁(湖北)に戦つて敗れたが、つひに北支那を領し、その子曹丕に至り、後漢最後の獻帝を廢し、魏國を建てて洛陽に都しました。かくて漢は前後併せて約四百年にして亡びました。

第二節 漢代の文化

儒學尊重

支那歴史の父

漢の二大歴史家

女誠の著者班昭
(曹大家)

① 學術 漢の武帝の時は、外征にも成功しましたが、學術も振ひ興り、帝は特に儒學を尊び、之を以て政治と教育の標準と定めました。また帝の時に司馬遷が出て、史記を著し、支那歴史の父といつてもよいやうになりました。後漢の世には班固が出て、漢書を著し、史記と漢書は後世修史の模範となりました。

班固の妹を班昭といひますが、文學に長じ、また婦徳を以てあらはれ、「女誠」といふ



班昭(曹大家)の像

書を作り、女子の修身書として、我が國にも用ひられました。班昭は後漢の第四世和帝の宮中に仕へ、皇后・女官の教師となり、大家と尊稱され、世に之を曹大家曹氏に嫁したので、かくいはれます」といひます。

漢字の諸體とその發展

紙と筆の發明及び精製

前に起り、大體西周の中頃迄の文字を古文といひ、西周の時、篆書の發明あり、秦に至り、又隸書の發明あり、その後楷・行・草の三體が起つた。文字を書くに、初めは竹・木及び絹などを用ひたが、後漢に至り、麻布・樹皮の類から紙をつくることを發

漢字及び紙筆 漢字は周代以

篆書	山	水	魚	鳥	靜	淑	貞	烈
隸書	山	水	魚	鳥	靜	淑	貞	烈
楷書	山	水	魚	鳥	靜	淑	貞	烈
行書	山	水	魚	鳥	靜	淑	貞	烈
草書	山	水	魚	鳥	靜	淑	貞	烈

文字の變遷

明し、秦の時に精製せられた筆とともに大いに世人を益し、文化の普及と進歩を助けました。

③ 道教 後漢の末に、道教が起りました。これは支那古來の民間信仰に、周代の老子・莊子の説を加味したもので、長生・幸福を求め、ために、道を行ひ、鬼神を祭ることをつとめた現世的宗教で、張良の後と稱する張道陵の開いたものであります。道教は、儒教及び文章に説く所の佛教とならんで支那の三教といはれます。

道教の性質

儒・道・佛の三教

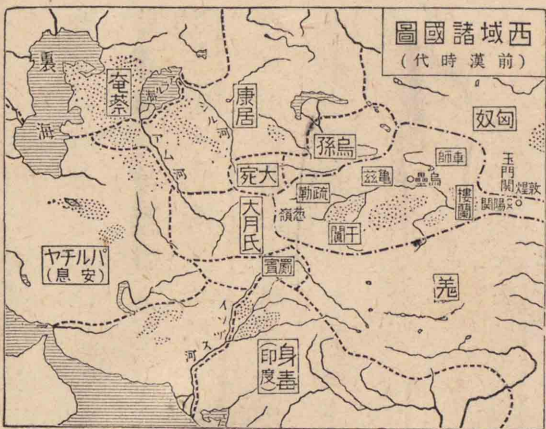
張騫の遠征

第三節 西域との交通 佛教の東傳

● 漢と西域 西域とは匈奴の西邊と今の新疆省地方及びパミール高地以西の地方の總稱である。前漢の武帝が匈奴を征伐した頃、中央亞細亞に大月氏といふ國がありました。武帝はこれと同盟して、匈奴を挟み撃たうとして、張騫を大月氏に遣はしました。これか

西方物産の東傳
と支那絹の西傳

ら漢と西域諸國との交通始
めて開け、葡萄、苜蓿、石榴など
の西方の物産が次第に支那
に傳はり、又支那の絹絲は西



西域諸國圖

國方に傳はつた。後漢に至り、また大いに
匈奴を撃ち破り、また班超を遣はして
西域諸國を征服せしめました。班超は
西域に留ること三十年、大いに恩威を



（鑑古清西）鏡銅青の代漢の草唐葡萄の響影的臘希

班超の功勞

班昭の兄

王女細君

王昭君

西域に施しました。また當時の大事件は佛教の印度より東に傳は
つた事であります。班超は前にのべた班昭（一九）の兄であります。



像佛式ラダンガ

の烏孫といふ蠻國の國王に嫁いだが、言語は通ぜず、飲食・風俗も異なり、甚だ心さ
びしい思ひをしたといひます。
又その後武帝より三代目の元帝の時、宮女王昭君も國家のために、匈奴の大酋長
に嫁ぎ、異郷にその身を終り、その薄命は後の人に同情され、王昭君の事を畫に描
き、詩や歌に詠じたものが少くありません。

班超の西域についた時、匈奴の使
者も亦西域にきてゐて、その従者
頗る多かつた。班超は「虎穴に入ら
ずんば虎子を得ず」といつて、部下
を勵まし、夜襲つて匈奴の使者を
殺しました。これより西域諸國皆
その威に恐れしました。

武帝の匈奴征伐中、漢の王女細君
は、國家の政策のために、遠く西域

カニシカ王の盡力

② 佛教の東流 文化の融合 上代の印度の一節にのべた阿育王の後また約三百年を経て、中亞細亞の大月氏國にカニシカ王が出て、また深く佛教に歸依して、その布教につとめたので、佛教は次第に東傳して天山南路にも傳はりました。而して天山南路の東方は後漢の領地であります。

*皇紀七二七、垂仁天皇御代、西紀六七。百濟より本邦に佛教を傳へたのは、是より約五百年後なり

佛教の支那傳來 支那・印度の文化的融合

後漢の明帝は西方に佛教あるを聞き、使者を大月氏に遣はして、佛典と高僧とを求め來らしめました。これより佛教は漸く支那に流行し、また朝鮮をへて本邦にも傳來して、東洋の一大宗教となりました。佛教東傳とともに、之に關聯せる藝術も傳はり、支那文化と印度文化との融合がこの頃より始まるやうになりました。

第四章 三國兩晉南北朝時代

第一節 三國時代

蜀漢と吳の建國

*應神天皇御代の間

諸葛孔明の忠誠武略

草廬三顧 君臣水魚の交

● 三國の鼎立 第三章の中(一九)に、曹丕が後漢を倒して魏國をたてた事をのべましたが、その翌年劉備は成都(四川)に都して、帝位に即きました。これを蜀漢の昭烈帝といひます。ついで孫權もまた今の南京に都して、吳といふ國を立てました。かくて支那の天下は三分して、魏は北支那に、吳は南支那の東部に、蜀はその西部によつて、鼎立の形をなし相争ふこと四十年許り、蜀漢の地は最も小さかつたが、諸葛亮(孔明)の忠武によつて、よく他の二國と並び立つことを得ました。昭烈帝の死後、諸葛亮は幼主を輔け、必ず漢朝を興復せんと欲して、魏を伐つたが、惜むべし志を得ずして陣中に歿し、蜀漢はつひに魏に滅されました。

諸葛亮は、もと亂世を避けて、田野を耕し、立身出世を求めなかつたが、臥龍の名は、天下識者の間に高いので、劉備は三度その草廬を訪問し、誠意を表しました。孔明はこれに感激して、つひにその臣となり、君臣の情、極めてこまやかで、水魚の交と

出師の表は忠誠の結晶

死せる諸葛生ける仲達を走らす

*皇紀九四〇、應神天皇御代、西紀二八〇



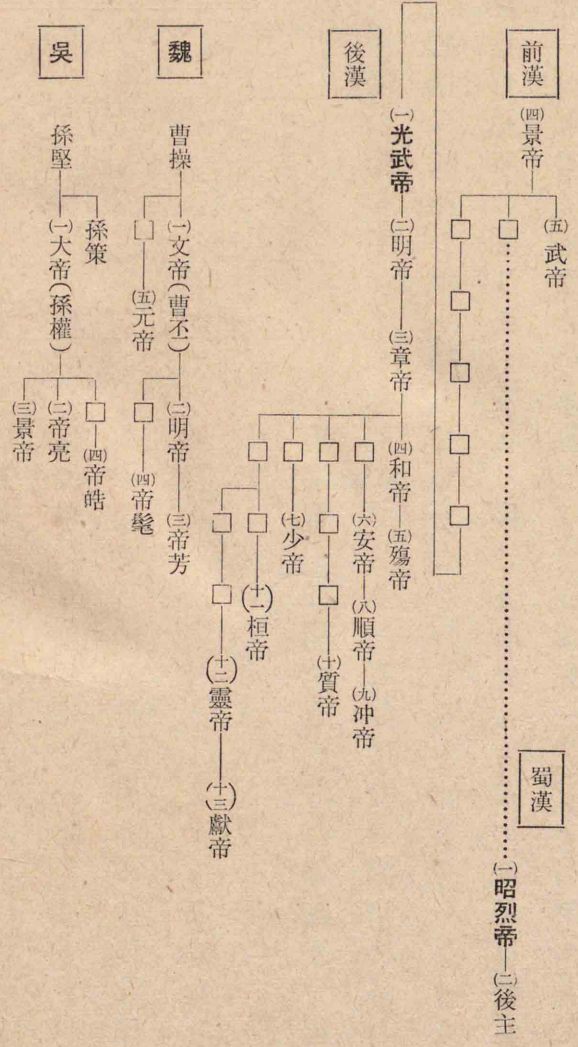
(像畫堂笑晚)亮葛諸

は「死諸葛走生仲達」といつたといはれてゐます。仲達とは魏の將司馬懿の字であります。

明治天皇御製 龍の臥す岡のしらゆきふみわけて草の廬を訪ふ人や誰 昭憲皇太后御歌 雪わけし深き心に臥す龍も今はと空に思ひたちけむ

● 晉の統一 既にして魏もまたその臣司馬炎に帝位をうばはれて亡び、司馬炎は更に吳を併せて天下を統一し、洛陽に都しました。これが西晉の武帝であります。

後漢と三國の系圖



第二節 兩晉・南北朝時代

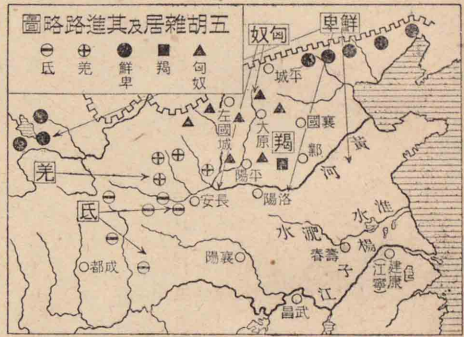
● 五胡の侵入 前にのべた如く、西晉の武帝は、支那を統一したけ

清談の流行
*清談とは禮法を
輕んじ、世務を
いやしみ、専ら
空理を談ずるを
いふ

五胡の侵入

晉の南遷

北部の混亂と南
部の文弱



五胡雜居及其進路略圖

れども、天下は平和ならず、士人は清談に
ふけつて國家を憂へず、外には北方及び
西方から支那に侵入した異民族の勢が
漸く盛になり、晉は之を防ぐことができ
ませんでした。是等の異種族は匈奴、羯、鮮
卑、氐、羌の五種であつたので五胡といひ
ます。

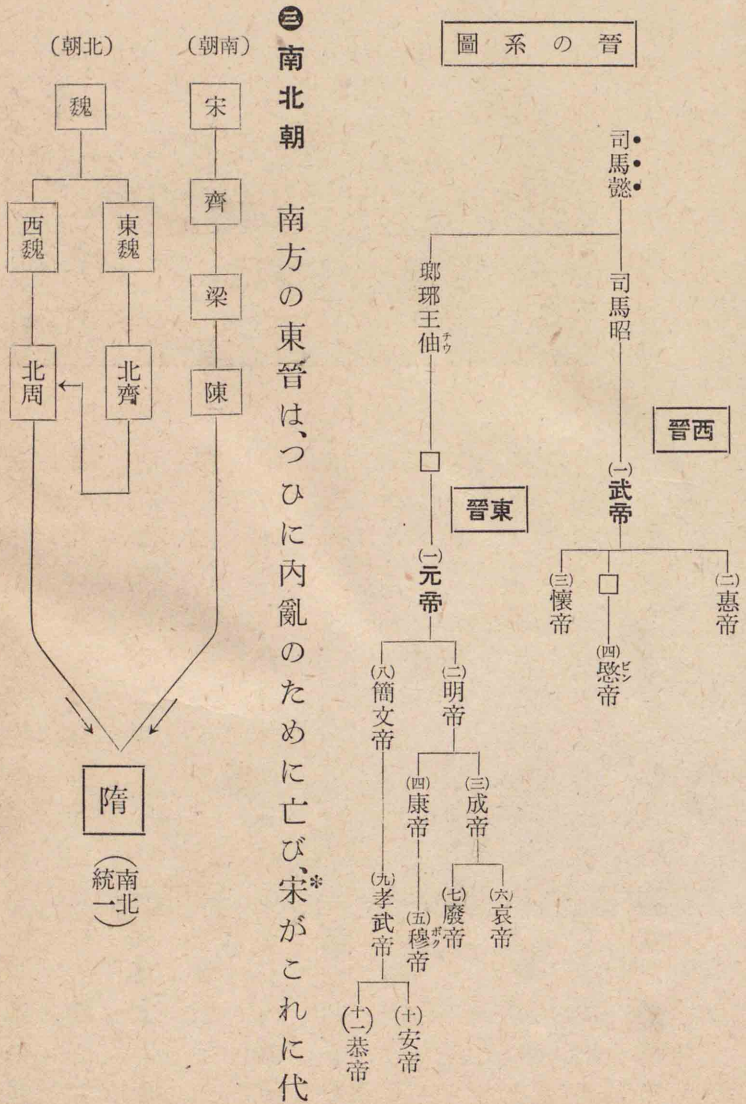
② 東晉 五胡の中、北方の匈奴まづ起つ

て、洛陽の都を陥れました。そこで晉の一王族は、今の南京に都して、
大體揚子江南の地を保ちました。これから後を東晉といひます。

東晉百餘年の間江南の文化は開けましたが、支那の北部は、混亂不
統一の狀多く、前秦といふ國は、一時江北を一統し、その勢が甚だ盛
でありましたが、忽ち衰へて、東晉は弱いながら、南方にその國を續
けました。

東晉と宋の交替
後魏の統一
*皇紀一〇八〇、
允恭天皇御代、
西紀四二〇

晉の系圖



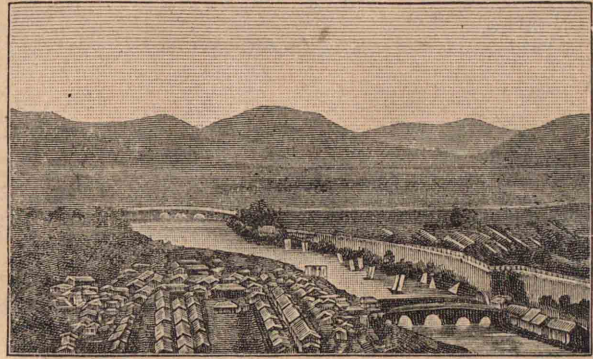
③ 南北朝 南方の東晉は、つひに内亂のために亡び、宋がこれに代

*皇紀一〇九九、
允恭天皇御代、
西紀四三九
南北對立

六朝時代

文藝榮えて諸名
家出づ

詩・書・畫の三代
表者



南 京 の 風 景 (近 世)

りました。これに對し北方では後魏が前秦について諸國を併合しました。そこで支那は南北の二朝となり、約百五十年を経過し、その間度々王朝が變りました。
④ 六朝文化 南方の四朝即ち宋・齊・梁・陳は三國時代の吳と東晉の二朝と同じく、今の南京に都したので、これを總稱して六朝といひます。

六朝の諸國は、強國ではなかつたけれども、文藝はなかく進歩し、諸名家がออกมาした。詩人では陶淵明、書家では王羲之、畫家では顧愷之などが特に名高くあります。

陶淵明は東晉より宋にかけて節義を以てあらはれ、また田園的詩人として有名



出其言善千里應之衞達斯義
同余以鏡

女 史 箴 圖

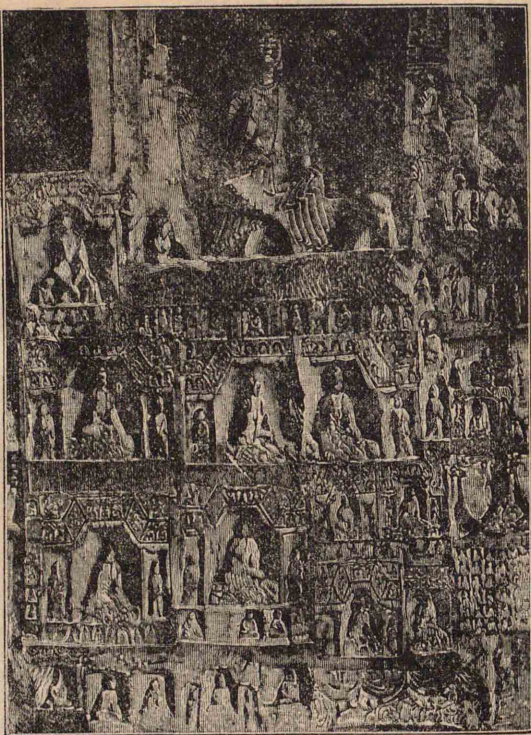
女史箴圖(顧愷之筆と傳ふ)

女史箴とは西晉の張華が女の誠を説いた小品文で、その詞を顧愷之の畫餘白に書いてあるものである。この畫は清朝の秘府より出て英國博物館の珍藏となつたものである。

であります。王羲之の書風は早く我が國に傳はり、昔から我が國の書家にも尊ばれてゐます。顧愷之は人物風俗畫にすぐれてゐました。

⑤ 佛教の流行 晉

より南北朝に至り、佛教は大いに流行しました。南朝第三



佛石の門龍の代時魏後近附陽洛省南河

梁の武帝の佛教信仰

はる 佛教益 東に傳

の梁の武帝(武烈繼體安閑宣化)は特に深く佛教を信仰し、自ら三寶奴と稱しました。この佛教流行の勢は獨り支那に止まらず、支那より東に及び、朝鮮半島の高句麗は、佛教を前秦より受け、また之を新羅に傳へ、百濟は東晉より受け、更に之を本邦に傳へました。

法顯の入竺

達磨大師と禪宗



達磨

晉より南北朝の間、東西諸名僧の往來があり、東晉の末、支那の僧法顯は、陸路を経て印度に往き、海路より支那に歸り、往復十二年、初め同行十餘人、歸るに及んで法顯一人のみでありました。これが支那僧が印度に入るの初めであります。
又南天竺の達磨大師は、梁の武帝の時海路支那に來り、禪宗を開きました。

第五章 隋・唐時代

好運の楊堅

皇紀一二四九
崇峻天皇御代、
西紀五八九
南北の統一
北強と南弱

●隋の統一 北朝の北周の外戚、楊堅といふものは、運よくして丞相の職にあること僅に九月にして、つひに帝位をうばひ、隋といふ王朝をたて、ついで南征して陳を滅したので、五胡の侵入以後約三百年で、漢民族また統一されました。之を要するに、南北朝の間、南北互に對立してゐましたが、柔弱な南

北朝の勝利

文帝の勤儉

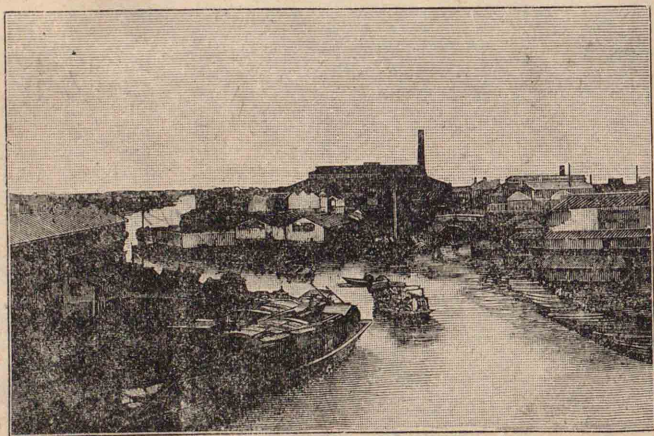
民力の復興

煬帝の豪奢

*皇紀一二六七、
西紀六〇七、
日本と支那との
修交の始め
運河の利益

人は到底剛強なる北人に敵せず、北朝系統の隋は、よく天下を一統して長安に都したのであります。隋の文帝は勤儉で、國民の休養をはかったので、多年の亂世に疲れた漢民族の力も漸く復興して、又もや大發展をなさんとするやうになりました。

●隋の煬帝 文帝の子煬帝は、豪奢を好んで、宮殿を造り、運河を開き、また連りに遠征を企てて國威を輝かさうとしました。我が推古天皇の御代に小野妹子を遣はして、交を修めたまふたのは、この煬帝の世であります。煬帝は巡遊などの爲に運河を用ひたけれども、運河はこれより後



支那の運河

*皇紀一二七八、
推古天皇御代、
西紀六一八
唐の高祖

秦・漢と隋・唐と
の比較

*太宗元年は推古
天皇三十五年、
西紀六二七

太宗貞觀の治

濟世安民の人相
三鏡の教

南北の交通を助けて利益を遺ゆしました。

㊦ 隋の滅亡　すでにして煬帝は東方の高句麗をうつて再び失敗するや、國民はつひに叛し、群雄四方に起りました。中にも李淵トシは次子李世民と共に、兵をおこして、遂ツレに帝位に即つき、長安に都しました。之を唐の高祖といひます。隋は三十七年にして亡び、國運の短きこと、恰も約八百年前の秦の如く、隋の次

隋の系圖

(一)高祖文帝　(二)煬帝　(三)恭帝　の唐の盛にして、國運の長きことは、恰も秦の次の漢のやうであります。

㊦ 唐の太宗　高祖について立つた唐の太宗トウソウは非常の英主で、文武の名臣また多く出て、帝を輔タマけたので、天下よく治まり、國威四方に輝き、時の年號によつて、貞觀の治とよばれました。

太宗は、その幼少の時、世を濟スひ、民を安んずるの人相があつたといふので、世民と名づけられました。帝は修身治國に注意し、銅を以て鏡となさば、衣冠を正すべし。

古を以て鏡となさば、盛衰を見るべし。人を以て鏡となさば、得失を知るべし。といつたなど、その美言善行は頗る多くあります。

㊦ 制度　唐の中央政府には、

尚書中書門下の三省があつて、天下の大政を統スべ、尚書省の下に吏部リ・戸部コ・禮部レイ・兵部ヒヤウ・刑部ギヤウ・工部の六部があつて、政務を分擔しました。また天下を分ちて十道とし、道の下に州と縣とを置き、縣に令、州に刺史を置いて、民政を掌らしめ、道ごとに巡察使があつて之を監督しました。また税には租庸調ソヨウテウの三種がありました。



(解像論聖)ふ賜に子太を範帝宗太

三省・六部

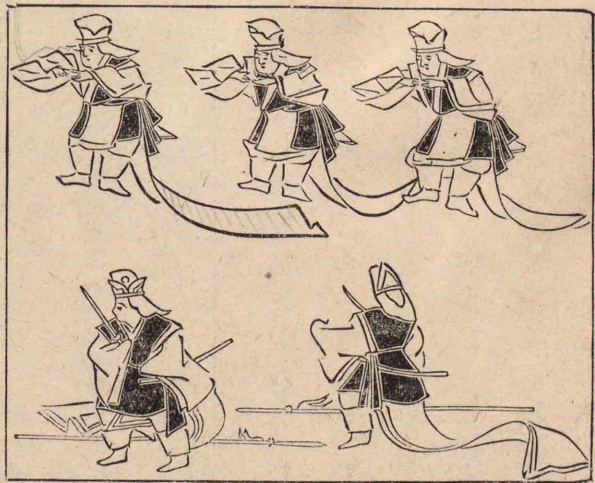
縣令・刺史及び
巡察使
租・庸・調

唐の制度は、支那後世の模範となつたのみならず、本邦古代の制度も、之を参考にしたほどでありました。しかし大寶令に於て、特に神祇官において太政官の上

日・支國體の相異

たらしめたのは、我が國の敬神思想に富めることをあらはし、唐制受容参考の中にも、十分我が國體を明らかにしてゐます。唐の舞樂もまた我が國に傳はりました。太平樂(一名武昌樂)は舞人銓をとつて舞ひ、武舞の一として名高く、萬歲樂は唐の宮中に養つてゐた鸚鵡が常に萬歲を唄ひしによつて出來たもので、やさしい舞であります。

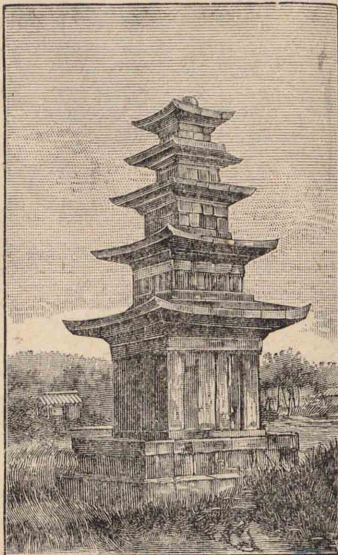
*皇紀一三二三、天智天皇即位前五年、西紀六六三
*皇紀一三二八、天智天皇即位の年、西紀六六八



部一の樂昌武(樂邦)(上)(人六圖原)部一の樂歲萬(說圖樂舞)(樂邦)(下)(人四圖原)

六 外征 唐の初め、朝鮮には、高句麗・百濟・新羅の三國がありましたが、高句麗・百濟は聯合して、新羅に當つたので、新羅は援を唐に請ひました。唐の太宗は高句麗を親征して、失敗したけれども、その子、高宗の時、唐はつひに百濟を滅し、ついで高句麗を併せ、平壤に安東都護府を設けて、その地を統

百濟・高句麗の滅亡
安東都護府
新羅の一統



唐大平百濟國碑
(近附餘扶道南滿忠鮮朝)

べました。新羅はよく唐に事へて國を保ち、後には殆ど半島を一統して、二百年許りつづきました。

突厥その他の外征
印度との交通
漢人の大發展

或は蒙古より中亞地方までをも領せる突厥といふ強敵を破り、或は今の西藏を伐ち、よつて遠く印度に通じ、或は威を南海諸國に示したので、唐の勢力の及ぶ所甚だ廣大となり、漢民族は大いに發展しました。

本邦の古今と外國文物

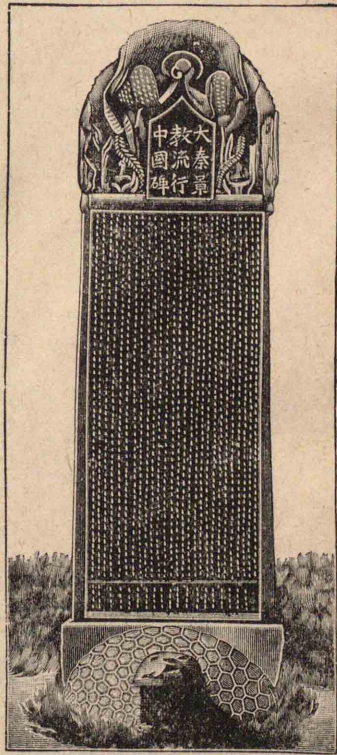
七 日本と唐 本邦は既に隋と交通しましたが、唐の世には、尙屢遣唐使を遣はし、僧侶・學生を留學せしめて、その制度・文物を攝取参考したことは、恰も明治時代以來の歐米に於けるやうでありました。

唐とアラビヤとの交通

回教と景教

玄奘の渡天
弘法・傳教兩大
師の入唐

⑧ 通商と諸外教 唐の世界的大帝國の建設は、東西の交通を促し、亞細亞大陸の西端にあるアラビヤ人も、印度洋を航海して、支那に象牙・犀角・胡椒・香料などを輸入しました。また東西交通の開くるや、西方諸國から回教・景教などの諸外國の宗教が唐に傳はりました。回教はアラビヤの宗教で、景教は基督教の一派であります。



(縣安長省西陝) 碑念記行流教景

⑨ 佛教の流行 もろくのの新宗教が傳はると共に、從來の佛教も益々流行し、玄奘の如き印度旅行と佛典翻譯とに有名な高僧も出で、また唐の時、我が國よりは弘法・傳教の兩大師などの入唐あり、當時

彼の國に流行した佛

教の諸派は概ね本邦

に傳はりました。

⑩ 則天武后 唐の初

期の盛な時にも、一つ

の不幸の事がありま

した。第三世の高宗の皇后武氏は智略に富み、高宗の死後、政權をに

ぎり、つひに自ら帝位につき、國號を

則天周と改めました。これを則天武后と

天いひます。かくて唐は一時中絶の状

武となりましたが、久しからずして復

興し、また有名なる玄宗の世となり

ました。



圖の天渡非玄

武后の即位



*皇紀一三七二、元明天皇和銅五年、奈良遷都の後二年に當る。西紀七一二年
開元の治

●玄宗 玄宗は唐の第六世の君で、即位の後、大いに政治に勉勵したので、天下また太平となり、その年號によつて稱せられる開元の治は、太宗の貞觀の治にくらべられました。玄宗はまた四邊の要地に節度使をおき、兵權を委ねて國境を守らしめたので、唐の國威また振ふやうになりました。



(左)甫 杜 (右)白 李

然るに、玄宗も後には心がゆるんで、政を怠り、東北方面の節度使安祿山叛き、帝は一時長安の都を逃れました。しかし顏真卿、郭子儀等の忠臣が力を盡し、また賊に内紛があつたので、叛亂つひに平定しました。

●文藝の隆盛 唐は文學を重ん

國亂れて忠臣出づ
*我が吉備眞備・阿倍仲麻呂の唐に留學せしは玄宗の世なり

李・杜・韓・柳の四大家

白氏文集

し、詩文の名家が多く出ました。その中玄宗の時の李白、杜甫の二人は詩人として最も名高く、更にその後四十年ばかりして、韓愈、柳宗元の二大文豪が出ました。又古來本邦の人に愛讀せられた白氏文集の作者たる白居易もその頃に出で、詩文の發達目ざましく、書畫音樂の藝術も進歩しました。

人皆有一癖。我癖在章句。

人ごとに一つの癖はあるものを我にはゆるせししまの道

(白居易)
(慈鎮和尚)

●年中行事 唐時代には、諸制度とともに、年中行事もとのひ、正月元旦の屠蘇酒の祝杯、正月七日の七菜の食事、三月三日の曲水の遊び、四月八日の灌佛の式、五月五日の端午の祭と菖蒲の湯、七月七日の七夕祭、同十五日の中元盂蘭盆の供養、九月九日の菊の酒、歳の終りの追儺の禳ひなどが行はれました。これ等の風俗は我が國にも傳はりました。

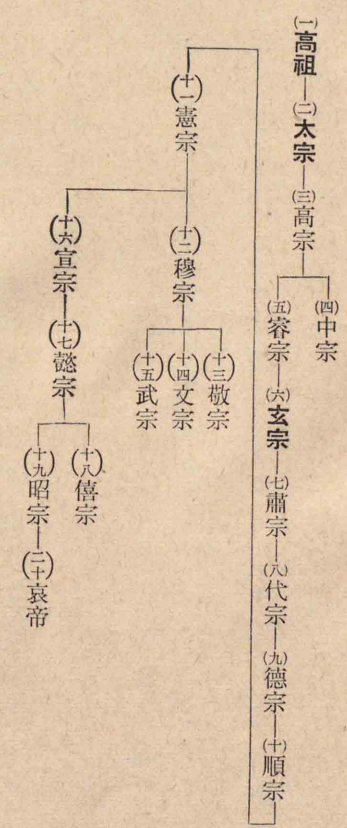
正月元旦
同 七日
三月三日
四月八日
五月五日
七月七日
同 十五日
九月九日
十二月大晦日

玄宗までとその後の唐

*皇紀一五六七、醍醐天皇御代、菅原道真の薨せしより四年の後、西紀九〇七年

唐の滅亡 唐は玄宗に至るまで、既に百四十年ばかり経過し、玄宗以後なほ百五十年ほど續いたが、安祿山の亂後、その國勢前の如く盛ならず、節度使の亂暴、宦官の專横に加へて、財政の困難あり、唐はつひに大木の枯るるが如く亡びました。

唐の系圖



第六章 五代・宋時代

五代 唐の亡びし後、五十餘年の間、支那の中原には、梁唐晉漢周

の五代、忽ち興り忽ち亡びて、みな統一の功を成さず、紛争やむ時なく、文學は衰へ、教化も廢れました。

内外の關係
遼の建國

渤海の興亡

*皇紀一五八六頃、醍醐天皇御代、西紀九二六頃

*皇紀一六二〇、村上天皇御代、西紀九六〇

遼と渤海 漢人の内に弱い時は、異族外に興るのが原則のやうで、唐末衰弱の際より、今の遼河の上流地方を占領した契丹人の勢力漸く興り、五代の初め、その酋長は皇帝と稱し、滿洲及び内蒙古に互る領地を有し、五代の中頃には國號を改めて遼といひました。また渤海は今の滿洲人の祖先たる靺鞨族が唐の玄宗の初世に建てた國で、本邦及び唐と交通したが、新に興つた契丹のために撃ち滅されました。

宋の一統 國民は、もはや唐末及び五代八十餘年の紛争にあき、早く英主の統一政治を望みました。幸にして五代の末、趙匡胤といふ一英雄が衆に推されて、帝位に汴京(河南)に即きました。これが宋の太祖であります。

宋の太祖
武力の弱

太祖は平和を旨とし、國民の休養に注意したので、國民漸く安堵することができたけれども、武力はやゝ弱くなりました。太祖の弟太宗に至り、天下を統一しましたが、宋は建國の初期以來、常に外敵に苦しみ、その後つひに遼に多額の銀と絹とを贈つて平和を維持しました。

宋の仁君
先憂後樂の名言

次の仁宗は、宋代第一の仁君として名高く、また「士は當に天下の憂に先ちて憂へ、天下の樂に後れて樂しむべし」といつて、天下の事に熱心な范仲淹、その他の名臣、大儒が少くなかつたけれども、外に對する勢は、なほ振ひませんでした。

王安石の新法

第六世の神宗に至り、深く之を憂へて、王安石を任用し、富國強兵の策をたてて、種々の新法を行はしめました。が、國民には反つて不便の點が多かつたので、司馬光等は之に反對し、是より新法、舊法の政争三十餘年に及び、政務は振はず、國力ますます衰へました。

司馬光の反對
新舊二派の政争



司馬光

司馬光は幼少より明敏であつた。遊戯の間、一兒あやまつて水甕の中に陥つた。衆兒みな狼狽してゐる間に、司馬光は石をとり、水甕を打ち砕いて、水とともに流れ出づる小兒を救つたといひます。

石とりてくだきしかめの水よりや

惠の波は世にあふれけん

高崎正風

女眞族の建國

*皇紀一七七五、
鳥羽天皇御代、
西紀一一一五

遼の滅亡
強い金と弱い宋

④金の勃興

宋は遼といふ外敵ありしが上に、また滿洲より女眞族起り、その酋長アクダ(阿骨打)は遼の軍を破り、皇帝と稱し、會寧(滿洲省吉林)に都して國を金と號しました。これが金の太祖であります。遼の攻撃に苦しめる宋の徽宗は金起れりと聞き、ひそかに之と結んで、共に遼をうつことを約し、宋は南から金は北から攻めて、つひに遼を滅したけれども、この役、金は宋人の弱いことを看破し、遼に

宋の國辱
*皇紀一七八七
崇徳天皇御代、
西紀一一二七
*皇紀一七九八、
崇徳天皇御代
北宋と南宋

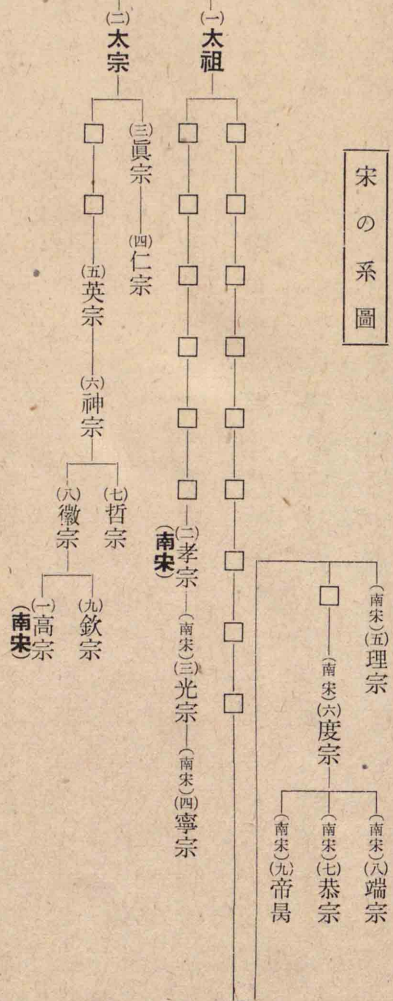
不名譽な平和
宋・金の衰運



岳飛

代つて宋に侵入して、その都を陥れ、徽宗父子を執へて北に還りま
した。そこで高宗が位に即きました。金の鋭鋒を揚子江南に避け、
つひに都を臨安(浙江)にさだめました。かくて高宗より以前を北宋
といひ、以後を南宋といひます。
⑤南宋と金 南宋の初、忠勇なる岳
飛等の主戦論者もありましたが、宰
相秦檜は和議を唱へ、つひに歳貢を
納めて金と和しました。しかし、金も
この後、漸く南方の文弱の風に化し
て、蠻勇の元氣を減じたので、南宋と
同じく衰弱しました。その時蒙古人が北方に起り、東洋史上の形勢
を一變せしめました。その事は次の章にのべます。

宋の系圖



宋の特色は文な
り

*皇紀一八六〇、
土御門天皇御
代、源頼家の時、
西紀一二〇〇、
朱熹卒す、年七
十一
朱子學



朱子 (晩笑堂畫傳)

⑥朱子學 宋の特色は武にあらざして、
文にあります。漢唐の儒者は、經書の字句
の解釋に力めたが、宋の儒者は高尙なる
哲學的研究に進み、南宋の朱熹に至つて、
この新しき學風を大成しました。これを
宋學または朱子學といつて、本邦にも傳

尊王賤霸の説

論語
孟子
大學
中庸

はり、特にその尊王賤霸の説は、我が國民にも深い感動を與へました。また朱子の論語孟子大學中庸の四書その他の註釋は、今もなほ甚だ廣く我が國にも行はれてゐます。

陽氣發する處、金石もまた透る。精神一到、何事か成らざらん。

（宋子格言）

蘇東坡の文學

司馬光の史學

禪宗の流行

⑦文學・史學 宋は唐とともに文學の盛な時代で、詩文の名家が多く出ました。特に蘇東坡は詩文に兼ね長じて有名であります。歴史の學も進歩し、司馬光の資治通鑑は最も名高い史籍であります。

繪畫の獎勵

⑧佛教 佛教もまた盛に行はれ、特に禪宗が最も盛で、美術とともに我が國に傳はりました。

印刷文化

⑨美術 美術も進歩し、徽宗は天子にして畫道にすぐれ、自ら花鳥などを畫き、また繪畫の獎勵に注意しました。

⑩印刷術 古代の書籍は皆筆寫したものでしたが、隋唐の頃から佛畫の印刷が始まり、五代を経て宋に至つては、その他の圖書も多



鳥 花 筆 宗 徽

喫茶の流行

く印刷され、大いに文化の普及を助けました。
① 喫茶 喫茶の風も、唐より宋にかけてますます流行し、他の文化とともに我が國にも傳はりました。

第七章 元 時 代

蒙古の根據地

偉大なる尊號
皇紀一八六六、
土御門天皇御
代、源實朝の時、
西紀二二〇六

東矢の教訓

① 成吉思汗 蒙古部は、外蒙古の黒龍江の上流のオノン河地方に遊牧し、遼金に屬してゐましたが、南宋の末に至り、その酋長にテムジンといふ英雄が出て諸部落を併せて成吉思汗（強盛なる君主の義）と號しました。

成吉思汗より十餘世の祖にアラン媛あり、五子の母でありました。五子の父既に死して、五子不和であつたとき、アラン媛は一日五子をならべ、一本の矢を與へて之を折らしめた所、皆容易に之を折りました。次に五本の矢を一束として折らしめた處、皆折ることができませんでした。母はよつて不和孤立の害と、共同一致の利を教へました。

成吉思汗の遠征

露西亞に侵入す

*皇紀一八八七、

後堀河天皇御

代、北條泰時

の時、西紀一二二

七

太祖の用兵神の如し

金の滅亡

成吉思汗はまづ南宋の西北邊にあつた西夏といふ小國を降し、ついで金を伐つてその黄河以北の地を略し、更に鋒を西に轉じて、中央亞細亞の諸國を征服し、また別に將を遣はして、今の露西亞に侵入せしめ、一旦東方に凱旋した後、つひに西夏を滅し、更に金を攻めようとして、陣中に病死しました。これを蒙古の太祖といひます。太祖はその一生に征服した地は、内外蒙古、天山南北路、支那の西北部と中、西亞細亞等に互り、實に世に稀なる英雄でありました。

高麗の降服

拔都の歐洲侵入

●太宗 太宗(名はオイ)は父太祖について立ち、つひに金を滅しました。當時朝鮮半島には、五代の初期に起つた高麗といふ國があり、これまで宋、遼、金の三大國に對して巧にその國を維持してゐましたが、太宗はこれを攻め降し、東方に於ては、ただ弱い南宋が残つてゐることとなりました。そこで太宗はさらに西方の大遠征を企て、拔都(太宗の子)を元帥とし

*皇紀一九〇〇年

頃、四條天皇御

代、西紀一二四〇頃

欽察汗國

て歐洲に侵入せしめました。拔都は先づ今の露西亞を攻め、遂に中部歐洲に攻め入つて、大いに歐洲諸國を恐れしめました。太宗の死を聞いて軍をかへし、露西亞の東南部に欽察汗國を建てました。太宗より後も、蒙古軍は、或はまた遠く西亞細亞を遠征して、將に埃及に入らざるとし、或は南方の雲南地方を攻め降して、益、その領地をひろめました。太祖について名高いのは、太祖の孫なる蒙古第五世の世祖忽必烈汗であります。

*皇紀一九二〇、

龜山天皇御即位

の時、北條時宗

の時、西紀一二六〇

遷都と國號の新定

宋の滅亡

*皇紀一九三九、

後宇多天皇御代

西紀一二七九

文天祥の忠義

●元の世祖 世祖は位につくや、これまで外蒙古にあつた都を今の北京に遷し、國號をたてて、元といひ、ついで南征して、宋の臨安の都を陥れました。宋はすでに甚しく衰微し、文天祥その他の勤王の士は、しきりに回復を圖りましたが、厓山(廣東)の戰に敗れ、宋は太祖より三百二十年にして全く亡びました。

文天祥は博學で、官は丞相に至りました。忠義の心極めて深く、力を宋の回復に盡

正氣歌

したけれども、時利あらずして、終に元軍にとらへられ、土窟の獄中にあること二年。その節操益々堅く、つひに死につきました。その獄中の作なる正氣歌は、名高いもので、我が藤田東湖及び吉田松陰も、また之に和して、各正氣歌を作りました。

身はかくてひとやのうちにくちぬとも心ばかりはいかでけがさん
佐々木弘綱

東征の失敗

世祖はまた前後二回我が國にも侵略を試みましたが、大失敗に終つたことは、我が國史にあらはれてゐますから、今更之を説く必要もありません。世祖の地慾はなほこれに満足しないで、ジャバスマ

南征の成功

トラ等の南洋諸島をも征服しました。

空前の大國

東西の交通 かくて蒙古は太祖より世祖に至るまで、凡そ八十年の間に

貿易及び文化の發展

亞歐の二大陸に跨る空前の大帝國をつくり、その間にあつた諸國が亡び去つたので、東西の交通は大いに開けま



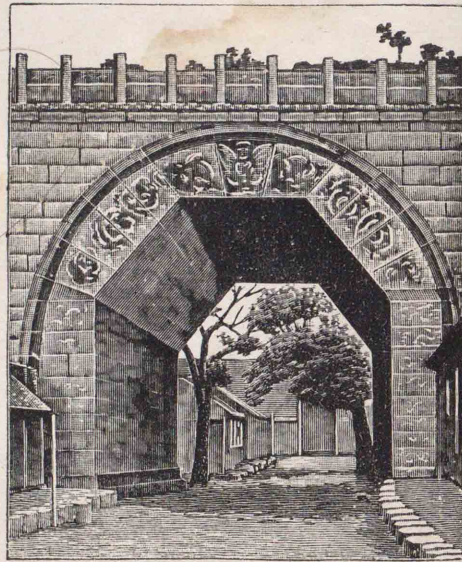
ローボ=コルマ



祖世の元(一)



祥天文の宋(三)
(像畫堂笑晩)



關庸居(二)



字二孝忠の意筆祥天文(四)

- (一) 元の世祖が祖父成吉思汗以來の遺業を大成して、大帝國を建てた事の
 大要は、本文に載せてある。
- (二) 居庸關は北平の北の昌平の西四里許にある。京張鐵道の南口停車場より
 は二里許である。此關門は元の世祖の創築にかかり、關の長さ
 二十二尺、高さ四間、廣さ四間、佛像を彫刻し、且つ漢字、蒙古字、梵字、西
 藏字、西夏字、ホルイク字(西藏語の一種)の六種の文字を以て、喇嘛教禮
 讚の文が刻されてある。印度、西藏、支那及び蒙古の藝術趣味を混合
 加味した建築は宏壯雄大で、彫刻の精巧活躍してゐる狀は、當時の元
 氣充實せる時代精神を發揮したものである。
- (三) は文・天・祥の像。(四)圖に示す所の忠・孝の二字は文・天・祥の筆意を模し
 たもので、唐崎常陸介が廣島縣賀茂郡竹原町磯宮八幡社内の千引巖
 に刻したものである。

した。當時東に來た西人の中最も名高いのはマルコ・ポーロであり
 ます。
 Marco Polo

マルコ・ポーロ
 ジパング(日本國)始めて西洋に知らる
 アメリカ新大陸
 發見

衰運の原因

第八章 明時代

マルコ・ポーロはもと伊太利ヴェニス港の商人であります。彼は十七歳の時、父と共に故郷を出で、元Italyに留ること十七年、大いに世祖に信任せられました。後本國に歸るや、東方見聞録を公にしました。西洋諸國殆ど之を翻譯しない國なく、我が國も之を翻譯し、また翻刻しました。また我が國は同書によりジパングZipangu(日本國)の名を以て始めて歐洲に紹介せられました。かのコロンバスの如きも、此の書を受讀し、大西洋より直航して、東亞に到らんとし、其間に思はずもアメリカ新大陸を發見したのであります。

● 元の衰亡 元は世祖に至つて隆盛を極め、その後漸く衰へました。その原因は、(一)元の領土廣きに過ぎて、統一の政なき事。(二)元の相續法は必ずしも父子の世襲を認めなかつたので、帝位相續の

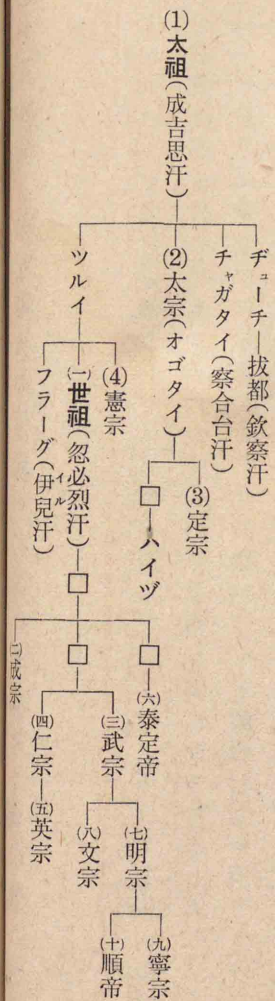
際は常に多少の争があつた事。(三)多年戦役の結果として財政困難となつた事などであります。

朱元璋の旗擧げ
*皇紀二〇二八、
後村上天皇崩御
の年、足利義満
の時、西紀一三
六八

こゝに於て、かねて蒙古人の下に屈服するを悦ばない漢人は、諸方に亂を起しました。中にも朱元璋は金陵(南京)によつて、まづ江南を定め、北征して元の都に迫りましたので、元の天子は、つひに蒙古に逃れました。かくて元は世祖の國號を改めてから九十八年にして亡びました。

蒙古(元)の系圖

(西洋數字は元といふ國號制定前、日本數字は國號制定後の世數)



元・明の革命

漢人の天下

皇后馬氏の婦徳

*皇紀二〇六二、
後小松天皇御
代、足利義持の
時代、西紀一四
〇二
永樂帝の北京遷
都

●明の太祖 朱元璋は即ち元のつぎの王朝たる明の第一世太祖であります。彼は武を以て亂を定め、文を以て國を治めたので、漢人はまたこゝに漢人の天子を戴くこととなりました。太祖はまた諸子を封じて、帝室の藩屏としたのはよいが、死後の事を心配し過ぎて、多くの功臣を殺したのは失策でありました。

太祖の皇后馬氏は、太祖の創業以來、内助の功多く、その婦徳天下に聞え、その崩後宮女は歌を作つて、我が后聖慈、化家と邦とに行はれ、我を撫し我を育す。徳を懷ひて忘れ難し、徳を懷ひて忘れ難し。といひました。

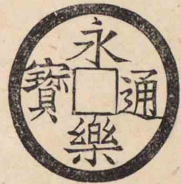
●明の盛世 太祖崩じ、孫惠帝つぎました。帝は諸藩王の強さを恐れて、これを抑へましたが、叔父燕王は兵をあげて、反つて金陵を攻め、つひに惠帝に代つて天子となりました。これが第三世の成祖(永樂帝)であります。

成祖は後に國都を今の北京に遷し、北は韃靼(元の改名)を征し、南は安

鄭和の遠洋航海

南を伐つたのみならず、惠帝の或は海外に逃れたるやを疑ひ、鄭和に命じて、これを探らしめました。鄭和は前後七回、南洋及び印度洋に遠洋航海して、明の恩威を示したので、同方面の諸國多く明に貢し、明人は國家の名譽として誇りました。成祖の後、約四十年は、明の極盛の世と稱せられました。また明はこの頃より美しい陶器の製造を以てあらはれました。

永樂錢の輸入



④ 日・明交通 足利氏時代に至りしは、く、明と交通し、明の永樂錢は、これより本邦に輸入せられました。その外明より藥種織物などが我が國に輸入され、僧侶・畫人などの明にゆきしものが少くありません。

⑤ 南北の外患 明も一盛一衰の例にもれず、第六世の英宗より後の明朝は、蒙古の遺衆、南は邊境の海賊の侵入などを被り、北虜・南夷といつてこれをふるひ恐れられました。これら南北の外患は明朝をた

北虜と南夷



器 陶 の 雅 姿

陶器は支那の世界的名産の一である。
我國の陶器工業の進歩も近古支那特
に明代以後の支那に負ふ所が少くな
い。

いへん衰へしめました。

朝鮮の役

高麗は久しく元

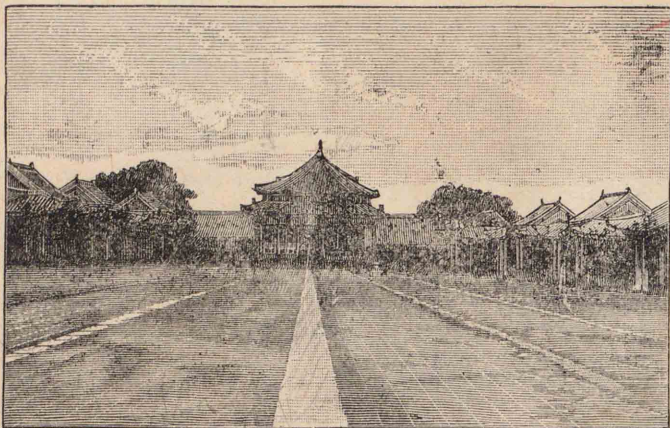
に服従してゐましたが、元末明初に
至り、内には姦臣あり、外には南夷の難
あつて、その國勢漸く衰へた時、李成桂
は南夷をうつて功があり、遂に自立し
て王位につき、今の京城に都しました。
これが朝鮮の太祖で、今の李王家の先
祖であります。その後、豊臣秀吉は國威
を海外に揚げやうとして、先づ朝鮮に
出兵したので、明の神宗(萬曆帝)は大兵を
發して朝鮮を援け、反つて大敗し、これ
より後、明は益々衰へました。

七 滿洲の勃興 この時に當つて、やが

滿洲と明

朝鮮役の影響

朝鮮の太祖李成桂
明と朝鮮
*皇紀二〇五二、
後龜山天皇御
代、足利義滿の
時、西紀一三九
二



(建創の宗太の清)殿政太の天奉

蒙古と南宋

て明を覆す^{ツツガ}べき強敵滿洲人は明の東北に勃興しました。その状恰も中古史の末、南宋の衰へた時、蒙古が北方に興つたと同様であります。

*皇紀二二七六、
後水尾天皇御代、徳川家康の薨せし年、西紀一六一六

後金の太祖

*皇紀二二九六、
明正天皇御代、徳川家光の時、西紀一六三六

清の國號

清と朝鮮

*皇紀二二九七、
西紀一六三七

*我が足利義政より義晴の頃まで
王陽明

神宗時代の滿洲にヌルハチユといふ酋長がありました。興京^(奉天のより少)方面より起つて、次第に近隣の諸部族を併呑し、自ら帝位につきました。これが後金の太祖であります。太祖はついで明と朝鮮の聯合軍を破り、益、勢を得、都を今の奉天に遷しました。是より太祖とその子太宗は、益、滿洲及び蒙古地方を征服し、太宗の時には國號を清と改めました。

時に朝鮮は猶明に好意をもつてゐたので、清の太宗は之を征して全く屈服せしめましたが、朝鮮人は清朝に心服しませんでした。

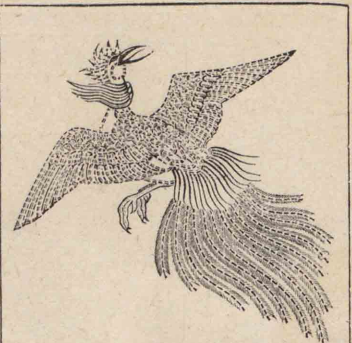
⑧ 元・明の文教 元の文學は小説・戯曲の發達をその一特色とし、明はその中世に王守仁^(陽明と號す)といふ學者が出て、良知の説を唱へ、道

知行合一の教

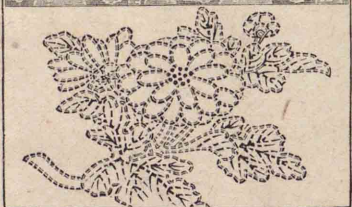
山中の賊と心中の賊

帖木兒

*皇紀二一八六、
後泊原天皇御代、足利義晴の時、明の中世、西紀一五二六



致良知



書 の 樹 藤 江 中

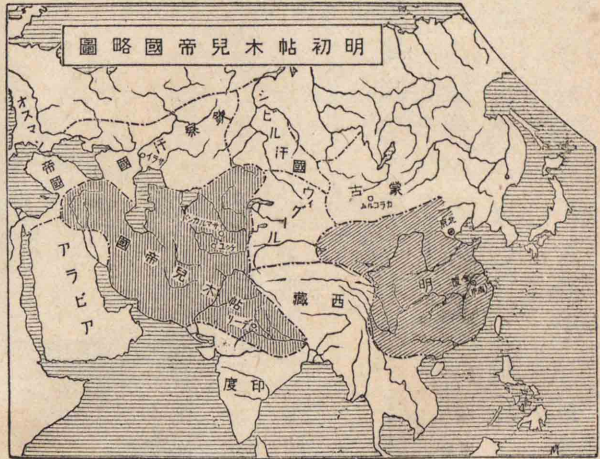
は我が心に求むべきことを説き、また知行合一の理を教へました。

の賊を破るは難しとは王陽明の一名言であります。王氏の學は陽明學として世に行はれ、我が中江藤樹、熊澤蕃山なども篤く之を信じました。實行力の強い學問でありました。

⑨ 莫臥兒帝國 明の初め、第二の成吉思汗ともいふべき帖木兒といふ豪傑があらはれて、中亞及び西亞の大部分を併せ、大國をたてました。

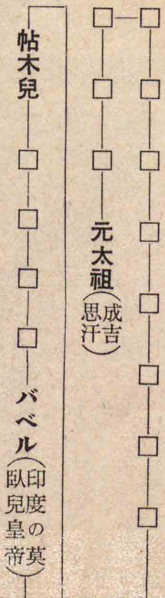
それより、百餘年を経て、その五世の孫バベル^{Baber}は印度に攻め入り、莫

莫臥兒帝國の盛衰

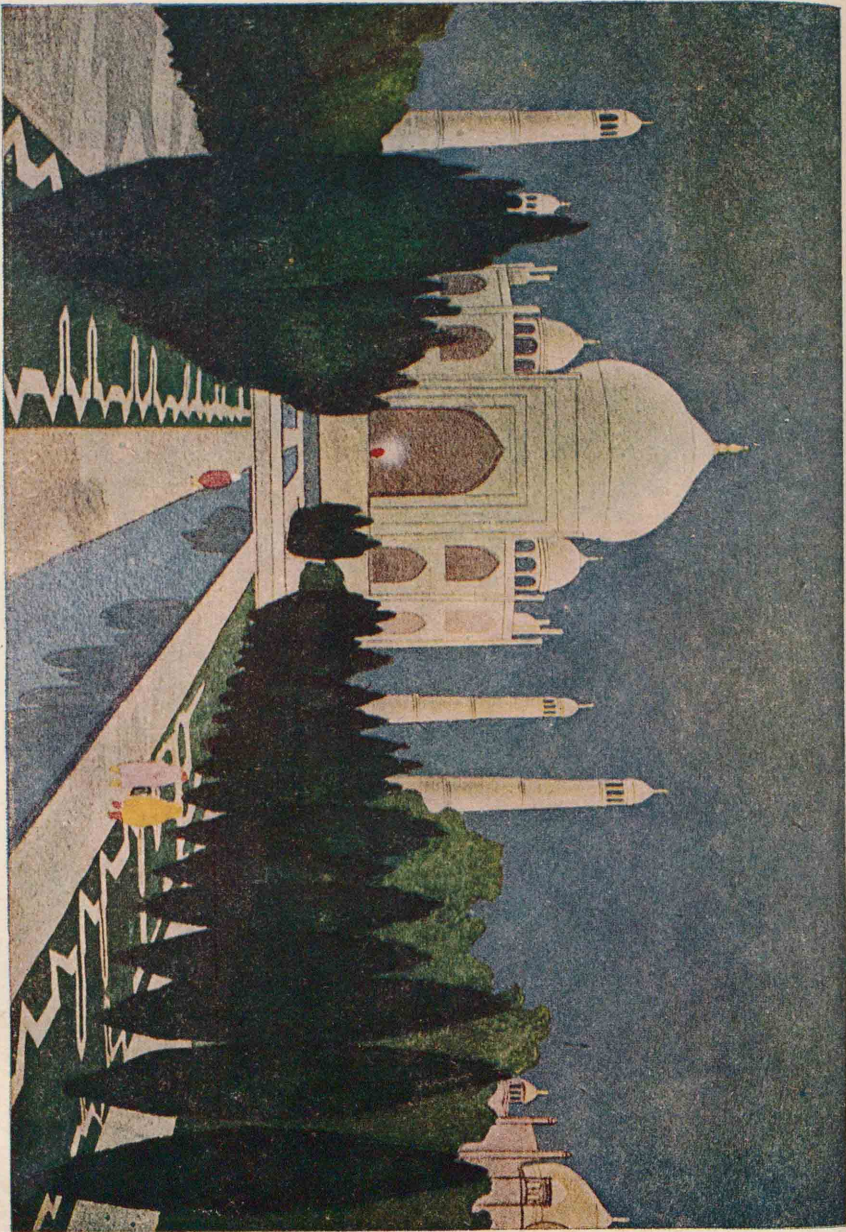


ガール
Mughal
臥兒(蒙古の轉音即ち)帝國の基をたてまし
た。その孫阿克バルに至つて、同帝國益
盛となり、その後全印度を一統したけ
れども、久しからずして帝國は漸く衰
へました。

帖木兒大王及び莫臥兒帝の系圖



フマユン—アクバル—ジハンギル—シャージハン—アラウングゼブ



タ
ム
フ
ン
ン
ー
マ

タジマハール (Taj Mahal)

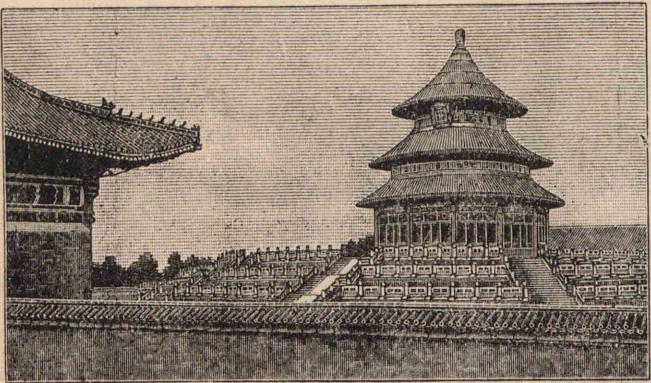
タジマハールは、アクバル大帝以後の莫臥兒帝國の首府であつたアグラ市附近に在る。アクバルの孫シャージハン及び其皇后の陵廟である。シャージハン時代は印度空前の繁榮な時代として名高く、此陵廟は、白大理石の建築中に、青玉、瑪瑙、珊瑚等の珠玉を交へ入れて、甚だ美麗である。晴天の晝間此處に至るや、日光赫々、白石と相映じ、目を開け難い程である。月夜の觀望は特に美しいさうである。

第九章 清代

毅宗の殉國

世祖の北京遷都と辮髮令

明の遺臣の忠義
鄭成功義兵を起す



北京天壇

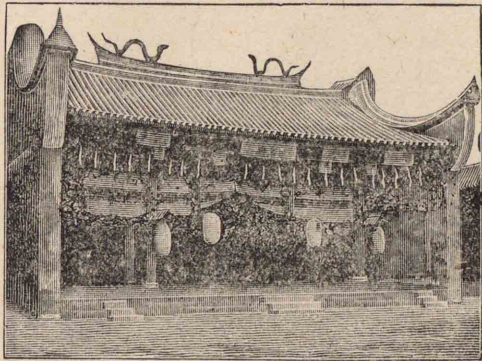
● 明の滅亡 明の衰弱は既に前にのべましたが、(五七) 神宗の孫毅宗の世に至り、賊徒四方に起り、賊軍はつひに北京に亂入し、毅宗は自殺し、明は二百七十七年で亡びました。こゝに於て清朝第三世の世祖(太宗)は都を北京に遷し、辮髮の令を下して、滿洲の風俗に従はしめました。されど明の遺臣は、なほその諸王をいたゞき、江南に據つて回復を圖つたけれども、皆敗れ、清はつひに支那を統一しました。

● 鄭氏の孤忠 明の遺臣の中では鄭成

烈女田川氏

功が最も名高く、その母は我が平戸の田川氏で、烈女として有名であります。成功はまづ厦門(福建省)に據り、ついで臺灣に至り、和蘭人をおひはらつて、これを占領し、力を明の爲に盡したが、つひにその志を得ませんでした。

國姓爺



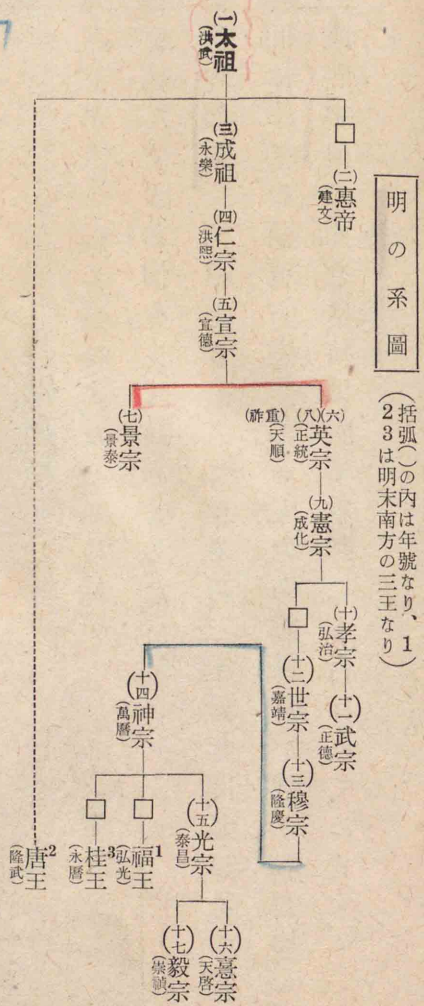
開山神社

鄭成功は明の國姓朱氏を賜はつたので、國姓爺と呼ばれ、我が近松門左衛門の傑作の劇曲「國姓爺合戦」にも、その忠勇を傳へられてゐます。今の臺灣臺南縣社開山神社は成功を祭つた神社で、後殿にはその母田川氏も祭られてゐます。また明清革命の際、明人の清に仕ふるを恥ぢて本邦に歸化したものが多く、中にも朱舜水は徳川光圀の師資となり、僧隱元は本邦黄檗宗の開祖として、特に名高い。今の東京市本郷區東京帝國大學農學部構内は舊水戸藩邸で、舜水の病歿した處であります。光圀が湊川に建てた嗚呼忠臣楠子之墓の裏面の碑文は舜水の心をこめて作つたものであります。

朱舜水及び隱元

楠公碑文

明の系圖



(括弧)の内は年號なり、1、2、3は明末南方の三王なり

清朝の極盛

清は第三世の世祖のとき略支那を一統し、それよりその國運は益々盛となりました。特に第四世の聖祖(康熙)と第六世の高宗(乾隆)の世は清朝の極盛時代であります。康熙帝は在位六十一年の間、内亂を平げ、臺灣を取り、蒙古を併せ、西藏地方を征服したる



聖祖康熙帝

二帝の文武の功
後西・靈元・東山
中御門四天皇御
代・徳川家綱・綱
吉・家宣・家繼・吉
宗の五代

*櫻町・桃園・後櫻町・後桃園・光格
五天皇御代、徳川吉宗・家重・家治・家齊の四代

全盛と尊大

學術の進歩

武勳の盛なるのみならず、學術獎勵の功も甚だ大きいものであります。その孫乾隆帝もまた在位六十年の久しきに及び、天山南北兩路を平げ、Barmaバルマ・安南及びシム等等を降したので、その領地は漢唐二代の盛時にも優るやうになりました。けれども之が爲に、支那人をして益尊大ならしめ、外國を輕んずる習慣を生ぜしめました。



高宗乾隆帝

第十章 歐米諸國のアジヤ經略

葡萄牙人の率先

*皇紀二一五八、後土御門天皇御代、足利義澄の時、西紀一四九八

*皇紀二二二七、後奈良天皇御代、足利義輝の時、西紀一五五七

*皇紀二二〇三、後奈良天皇御代、足利義晴の時、天文十二年、西紀一五四三

○西洋人の東漸 明の中頃より、歐洲の形勢一變し、諸國競つて、航海植民の業につとめました。中にも葡萄牙人は莫臥兒帝國の建國より三十年ばかり前に、他の諸國に先だつて、始めて印度に達し、これより、その國人はつゞいて東洋に來り、つひに明の澳門を占領してこれを根據としました。それより十數年前すでに本邦にも來航し、頗る久しく東洋貿易の利を占めてゐました。



明の徐光啓 (右) 利瑪竇 (左)

西班牙人も葡萄牙人

*皇紀二二二五、
正親町天皇御
代、足利義輝の
時、西紀一五六
五
蘭人の成功

*皇紀二二八四、
後水尾天皇御
代、徳川家光の
時、西紀一六二
四
サヴィエル及び
リッチ(漢名利瑪
竇)

露西亞の獨立と
東略

ついで東洋に來り、^{Philippine Island}フィリッピン群島を占領して、^{Manila}マニラに據り、また我が國にも來ました。

●和蘭と東洋 和蘭人はやゝ後れて、東洋に着眼しましたが、先に東洋貿易に着手した^{Holland}葡西兩國人と競争してつひに成功しました。

ジャバの^{Lava}バタバヤはその根據地で、我が國とも通商し、更に一時^{Taiwan}臺灣を占領しました。

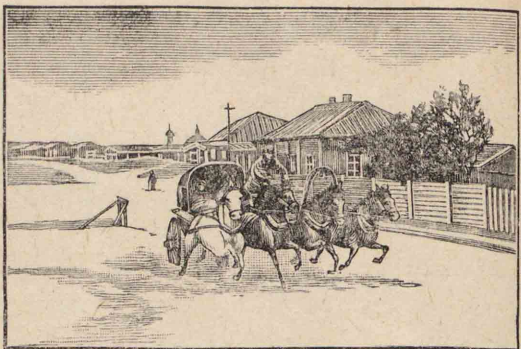
●耶蘇教の東傳 西洋人の來航とともに、耶蘇教もまた東方に傳はり、^{Kavirai}ジスイット派の^{Roch}サヴィエル及び^{Rich}リッチは、當時東洋に來た宣教師中、最も名高いもので、明に於ても、徐光啓といふ大官その他の人が信者となりました。

●清露の交渉 久しく蒙古人の勢力の下に屈服してゐた露西亞も、明の中世に至り始めて獨立し、その後次第に^{Siberia}シベリヤを略し、清の初めには、東亞に達し、遂に滿洲の北部に入つて、清露二國の争と

*皇紀二三四九、
東山天皇元祿二
年、西紀一六八
九

*皇紀二二六〇、
後陽成天皇御
代、豊臣秀頼の
時、明の神宗時
代、西紀一六〇
〇
衰運の兆候

*皇紀二五一七、
孝明天皇御代、
西紀一八五七
印度女皇
*明治九年、西紀
一八七六



ベシヤリヤ風景

なりました。そこで清の康熙帝は露西亞の^{Peter the Great}ピーター大帝に交渉し、二國の使臣は^{Nikolai}尼布楚(外バ州)に會し、會議の結果、外興安嶺を以て二國の境界と定めました。

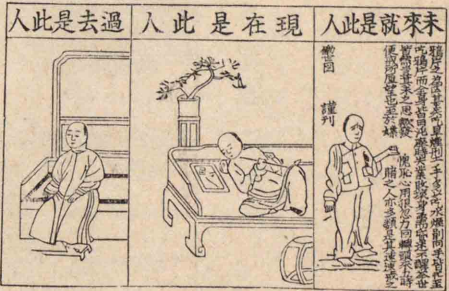
●英領印度 康熙乾隆の全盛時代のすでに過ぎ去つた後は、清朝受難の時となり、阿片戦役に至つて、始めて衰弱の状態をあらはしました。これより先き、英吉利人も葡萄牙人、西班牙人及び和蘭人につゞいて東洋の利權に着眼し、東印度商會をたてましたが、遂に印度の侵略に着手して、^{Opium}衰へてゐた^{British India}莫臥兒帝國を滅し、^{Victoria}英國女王ヴィクトリアは印度女皇の位を兼ねることとなりました。

●阿片戦役 英人は印度に勢力を得てから、盛に印度の阿片を清

阿片の害毒

林則徐阿片を燒

*皇紀二四九九、
仁孝天皇御代、
西紀一八三九



阿片吸煙の者(健康)去過の(衰弱)來未(惰怠)在現
態狀三の

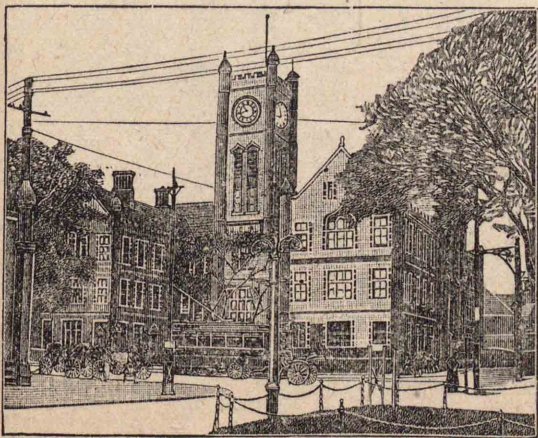
國に輸出し、その害毒甚だ恐ろしいので、乾隆帝の孫宣宗(道光)の時、特派大臣林則徐は、大いに憤つて廣東に於ける英國商人の阿片を燒き棄て、英人の通商を禁じました。そこで英國は貿易の保護を名として、戦を開

き廣東、廈門等の

の港を封鎖し、遂に南京に迫りました。

⑦ 南京條約 こゝに至つて清朝も大

いに恐れ、南京に於て和約を結び、償金を出し、上海、寧波、廈門、福州、廣東の五港を開き、且つ香港を譲りました。これを



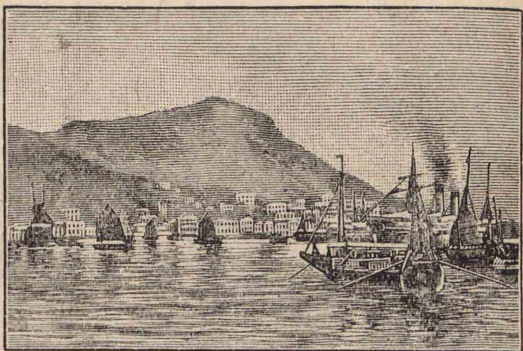
上海海關

南京條約
上海の繁昌

外患と内亂

太平天國

會國藩などの義
勇兵



南京條約といひます。これより後、清國と歐米諸國との條約が次第に結ばれ、上海の貿易は支那第一となりました。

⑧ 長髮賊 阿片戦役について起つたのは、長髮賊の内亂であります。清朝が同戦役に敗れたのに乗じて、洪秀全は亂を廣西省に起し、國號をたてて、太平天國とい

ひ、遂に南京に據りました。之を長

髮賊(剃頭辮髮せ)といひます。時に官軍は之を平げることが出来ず、勤王の名臣曾國藩李鴻章など義勇兵を起して、賊軍を破つたけれども、賊勢は未だ衰へませんでした。

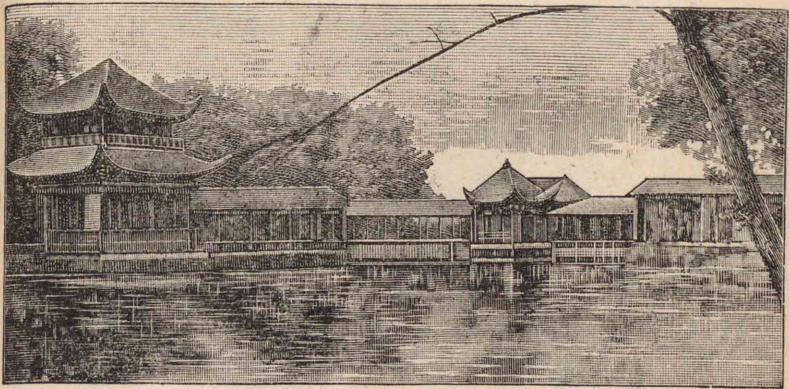


太平天國玉璽

北京條約

*皇紀二五二〇、
孝明天皇萬延元
年、西紀一八六〇

ゴルドンの義勇



(縣沙長省南湖) 祠の藩國會

⑨ 英佛の侵入 時に廣東の官吏が一英船に入つて、有罪の清人を捕へて、英國人と衝突した事があつた上に、佛國の宣教師も廣西に殺されたので、英佛の軍が聯合して遂に北京を陥れました。清國はつひに和を請ひ北京條約を結んで、償金を出し、基督教の布教を許し、牛莊漢口などの港を開きました。

⑩ 長髮賊平定 これ等の外患の爲に、内亂の平定は大いに後れましたが、曾國藩など益奮戦し英人ゴルドンなどが官軍を助けたので、賊勢漸く衰へ、洪秀全も敗れ死し、餘賊も次第に平定されましたが、

戦亂の影響

この亂の起つてより十五年の間その難を被つた地方は十六省に互り、清の國力大いに疲れ、外國の壓迫益々しくなるやうになりました。

⑪ 露國と滿洲 露國の東方

侵略の鋒も、康熙帝の時、や

鈍つたが、露國は常に機會をねらひ、長髮賊の亂に乗じて、黑龍江以北を取り、また清國と英佛二國との和議に斡旋した報酬として烏蘇里江以東を譲りうけ、その南端に浦蘆斯德港を開いて、東方經略の根據地としました。こゝに於て露國は漸く朝鮮の北境をも壓せんとする勢を示すやうになりました。

⑫ 樺太占領 ついで露國は我が國に交渉し、千島と換へて樺太島



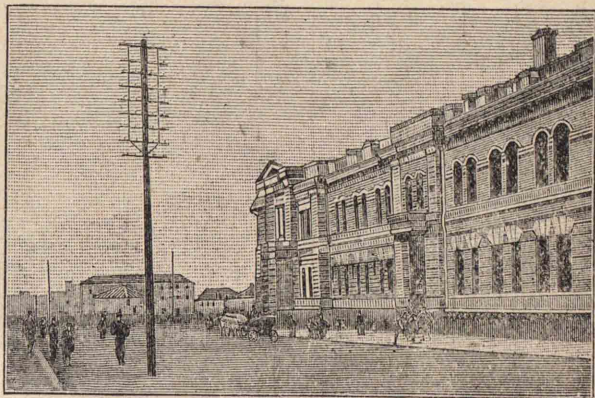
ゴルドン

浦蘆斯德の開港
露國と朝鮮

滿洲經略の餘波
*明治八年

露國の地慾

*明治四年



浦 鹽 斯 德

を得たので、日本海北部對岸の大陸と一大島は、悉く露國の有となつたわけでありませう。

⑤伊犁事件 露國は東方侵略と共に、康熙帝の頃より中亞の侵略にも着手し、遂に清の西北部の伊犁地方に接近し、たゞく同地方に回教徒の亂あるや露國はその鎮撫を名として伊犁を占領しました。既にして清國はその亂を平げて、伊犁の還附を求めましたが、

*明治十四年、

露國は之に應ぜず、清國はつひに償金を出し、一部の地を讓つて、その局を結びました。尼布楚會議に清國がやゝ優勢であつた時とは形勢が全く一變したのであります。

露國の南下と英國の反對

*明治二十年

英・露の次に佛蘭西

*皇紀二五二二、
孝明天皇文久二年、西紀一八六二

*明治十六年

④英・露衝突 露國は中亞侵略の鋒を南に進めて、印度洋に進出しようとし、印度を領する英國は、無論之に反對しましたが、つひに一歩を讓つて境界を議定し、戦を開かずに落着しました。

⑤佛國と安南 東洋經略について英露二國に次ぐものは佛蘭西であります。佛國は清の初めから安南に着眼し、その地の王族阮福映（テイグス）を援けて安南を統一せしめ、且つ基督教の布教に盡力したが、安南人は佛人に親（シク）しまし、しばく、宣教師を虐待したので、佛國は安南を攻めて、つひに交趾支那の地と償金とを得、ついでカンボヂヤ（Cochin China）をもその保護國としました。その後、安南王は佛人の專横を憤つて戦を開いたが、利あらず、遂に東京地方（トシケン）を割き、且つ佛國の保護國となることを約して和を結びました。（Tonking）

⑥清・佛戦争 然るに、清國は安南を以て藩屬國なりとしてこの講和に異議を唱へ、清・佛二國の戦となりましたが、つひに二國共に讓

*明治十八年
佛領印度支那の
成立

歩して、和を講じ、清國は佛國の東京地方を占領することを承認しました。かくて佛領印度支那成立し、さきに印度に於て英人と競争して失敗した佛人も、この方面では成功しました。

獨・露・佛・英諸
國の勢力益々東
漸す

●西洋諸國の壓迫 清國は、阿片戰爭以來、内外多難で、國運漸く下り坂となり、明治二十七年、八年(阿片戰爭より五十餘年後)の日清戰役に於て、更にその弱點をあらはしましたので、西洋列強の壓迫益々甚しく、その後數年の間に、獨逸は膠州灣(山東省)を、露國は旅順口(奉天省)と大連灣(奉天省)を、佛國は廣州灣(廣東省)を、英國は威海衛(山東省)を借りうけて、諸國は競つてその國の勢力を清國に伸ばさうとしました。

これまでアジヤ方面にその領地のなかつた北米合衆國も、東洋及び南洋に着眼して、つひに布哇國(菲律賓群島)を併せ、また西班牙と戦ひ、これに勝つて、フリッピン群島を得ました。

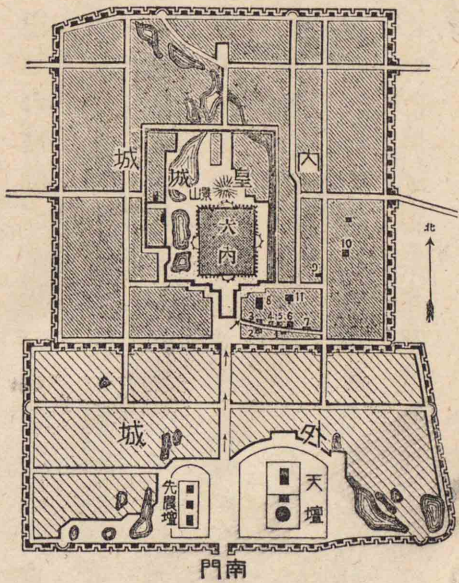
北米合衆國と東
洋及び南洋
*明治三十一年
*同年

第十一章 清の末路と中華民國

革新保守の二派
義和團の暴徒
*明治三十三年
北清事件

●壓迫の反動 西洋諸國の壓迫などによつて、清國の形勢は益々困難になつたので、その皇帝德宗(光緒帝)は康有爲を任用して、政治の革新を圖らうとしました。然るに清廷の舊臣及び滿洲人多くは之を悦ばず、西太后を擁して、政を聽かしめ、保守黨の勢また盛となつた上に、列強の壓迫は清國人の排外心を激し、山東省より義和團といふ暴徒が起り、遂に北京に亂入して、諸國の公使館を攻め圍みました。こゝに於て、日英米露獨佛奧伊の八國の聯合軍は北京に入つて、各國公使などを救ひ、遂に北京を占領しました。時に德宗と西太后は、一時西安府(陝西省)に避難しましたが、李鴻章などをして和を講ぜしめ、償金を出し、罪を謝して局を結びました。これを北清事件といひます。

北清事件の際、我が國軍隊の精銳で、その規律の嚴肅なることは、廣く各國に知られました。清國もまた我が國の義氣に感じて、我に依頼するの念を起し、或は官吏を派して我が制度、文物を視察せしめ、或は留學生を遣はして、我が諸學校に入學せしむることが漸く多くなりました。



(說 解)

- 1 北京城總周圍……………九里許
- 2 內城周圍……………六里許
- 3 外城周圍……………四里許
- 4 皇城周圍……………二里半許
- 5 大內周圍……………一里許
- 6 列國公使館等位置
- 7 獨 北米合衆國
- 8 露 西 牙 亞 國
- 9 日 西 本 國
- 10 佛 太 蘭 西 利 義
- 11 伊 吉 利 義
- 12 英 耳 義
- 13 白 耳 義
- 14 清國總理衙門(外務省)
- 15 清國總稅務司ロバートハート邸宅
- 16 軍隊進入口

● 韓國の併合

朝鮮は我が徳川氏時代以後、我が國と平和の交通をつづけ、明治維新の時に至り、我が國に促されて、列國とも條約を

日清戦役

*明治三十年

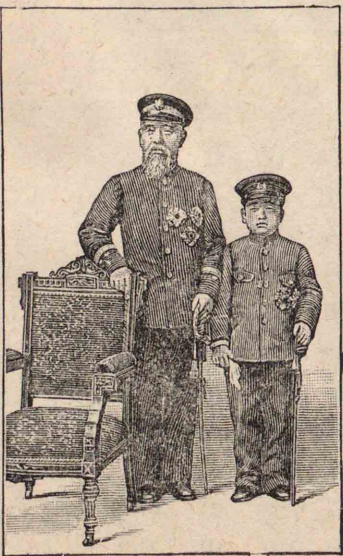
日露戦役

*明治三十八年

韓國併合

*明治四十三年八月

結びましたが、清國は朝鮮の獨立を悦ばず、日清兩國の意見、朝鮮に對して一致せず、つひに二十七八年の日清戦役となり、その戦後、朝鮮は我が國の爲に獨立の名義完全し、國號を韓と改めました。然るに、露國は北清事件の亂に乗じて滿洲を占領し、更に韓國を威壓しようとしたので、我が國は自國の安全と、東亞の平和とのために、露國と戦ひました。その結果、韓國は我が保護國となり、我が國は新に統監を京城に駐在せしめました。しかし、猶未だ韓國の治安を保ち難い形勢があつたので、韓國は遂にその國を我が帝國に併合することとなり、東洋の平和が維持されました。



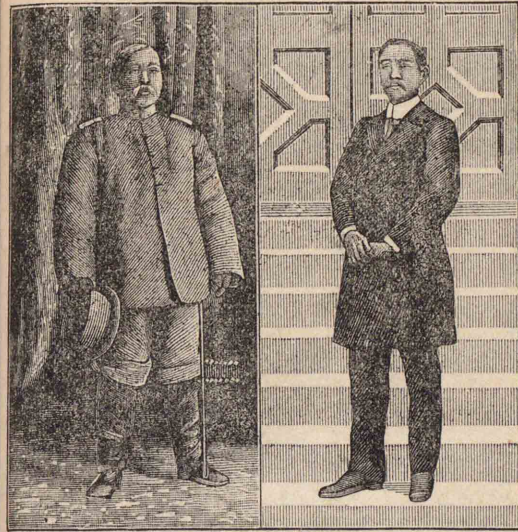
李王世子殿下と韓國統監伊藤博文

*明治四十一年
末路の幼帝

*明治四十四年十
月

孫文の革命思想
宣傳
革命黨の擧兵

●清帝退位と中華民国 斯の如き變遷の間にも清國はなほ歐米列強の壓迫を免れなかつたので、益々國政改革の必要を自覺して、立憲政體の準備を試み、光緒帝西太后相ついで崩じ、三歳の幼帝(宣統帝即ち今の滿洲國皇帝)が位に即いた後も、熱心に政治の改革に力めました。



孫文と袁世凱

然るに、清朝に不平なものが、急に兵を武昌(湖北)に擧げ、孫文(號は逸仙)などはその前後革命の思想を宣傳し、南部・中部諸省之に應じて、その勢甚だ盛となりました。かくて革命黨は南京に據り、共和政體を採用して、假政府を立て、國を中華民国といひ、孫文を臨時大總統としました。こゝ

幼帝の退位

*明治四十五年二
月

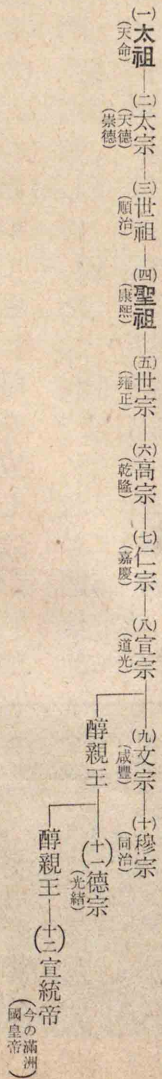
支那最近の革命

*大正二年

に於て清朝は内閣總理大臣袁世凱に命じて、南軍と清朝皇室優待條件を議決せしめ、幼帝は遂に退位の詔を發しました。かくて清朝は支那に君臨すること、二百六十九年にして亡びました。

●中華民国の成立 清が亡びし後、袁世凱はつひに第一期の大總統に選舉され、中華民国が正式に成立し、世界列國もこれを承認しました。

清の系圖



我が國外交の大方針

●日・獨開戦と日支交渉 袁世凱の大總統在職中、世界大戰が歐洲に起りました。けれども元來東洋平和の維持は、我が國外交の大方針であります。大正三年(支那民國三年、西紀一九一四年)七月に世界大戰の起るや、我が

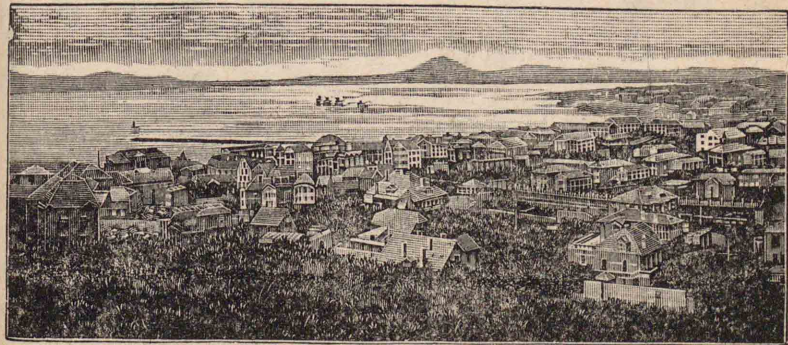
膠州灣占領

日支條約

國は此の大方針に基づき、獨逸に對しその日本海支那海方面にある艦艇の撤退及び膠州灣租借地の引渡しを要求しましたが、應じなかつたので、遂に戰を宣し(年大正三、膠州灣を占領しました(同月十)。又我が國は此の大方針により、翌年五月、日支條約を結び、(一)遼東半島の租借期限を延長し、(二)南滿洲及び東部蒙古に於ける我が優越權を認めしめ、(三)山東省に於ける獨逸の利權を我が國に於て繼續する事などを承認せしめました。

第三革命軍

●袁氏失敗 袁世凱は大總統となつた後、共和制を廢して、自ら皇帝にならうとしま



青島市の一部

袁氏の悶死

黎氏就任

突然の復位

した。こゝに於て、唐繼堯、蔡鍔など之に反對し、大勢は袁氏に不利となつたので、袁世凱は帝制宣言を撤回し、終に病死しました(年大正五)。是に於て副總統黎元洪は大總統となり、一時平和となりました。

●清帝の復位及び世界大戰參加 その後安徽省督軍張勳は兵を率ゐて、北京に入り、武力を以て國會を解散せしめ、一時宣統帝を復位せしめましたが(年大正六、段祺瑞に討たれて、忽ち失敗し(同年)民國は依然として存立しました。

世界大戰參加

この事變後、黎總統は、責を引いて辭職し、馮國璋之に代り、つひに支那も獨逸二國に對して戰を宣し(年大正六、)ついで徐世昌が大總統になりました(年大正七)。

●南北對立 上記の如く、國會の解散された時、議員は多く南方に避難しましたが、彼等は國會の復活を主張し、遂に孫文を大元帥として、廣東に軍政府を開き(年大正六、)西南五省(廣東、廣西、雲南、貴州、四川)之を助けたの

南・北兩政府

で、今や支那は、南北の兩政府が對立するやうになりました。その後兩政府は列國の勧めに従ひ、上海に和平會議を開くこととなりましたが(同八年)その効果なく、孫文はつひに南方政府の大總統となりました(同十年)。

● 山東問題 從來支那人は、大正四年の日支條約に不満でありましたので、世界大戰終つて、巴里講和會議の開かるゝや(大正八年一月)支那は獨逸に宣戰したといふことを理由として、この條約を無視し、獨逸より直接に山東の還附を受けんと盡力しましたが、その目的を達しませんでした。これ等の事情により、支那の一部に、所謂排日運動が起るやうになりました。

山東問題の解決

● 華盛頓會議 大正十年(一九二一年)十一月に至り、日・英・米・佛・伊の世界の五大國は、米國の華盛頓(ワシントン)に會議し、各國軍備の制限、太平洋問題及び極東問題等を協議し、平和の保障を計りました。支那もこの會議

に参加し、つひに我が國と協議して、山東の還附を受け、支那は膠州灣を開放し、山東鐵道は我が國より譲り受け、もと獨逸の採掘權を有して居た鑛山は、日・支兩國に於て經營することなどを議決しました(大正十一年二月)。

徐世昌在職四年



徐世昌 多事の支那 是等の内外多事の際、大總統であつた徐世昌は、在職四年にして辭職し(大正十一年五月十二日)、黎元洪之に代りました

が、直隸派軍閥の壓迫を受け、在職一年を以て辭職し、曹錕(曹錕)之に代りました(大正十二年)。彼は即ち直隸派軍閥の首領であります。これに對し奉天に據つて滿洲を勢力範圍として居る張作霖は悦ばず、大正十三年九月に至り、張作霖と直隸派の有力者吳佩孚とは、長城方面に開戦し、所謂奉・直兩派の戦争になりました。その結果、曹錕は幽閉され(同十年十一月)、段祺瑞が臨時執政となりま

奉直戰爭

臨時執政段祺瑞



段 祺 瑞

した(同年同月)。

段氏はそこで善後會議を開き、孫文などの有力者を集め、時局を整理し、政治の改善を議せんとしましたが、孫文は大正十四年三月北京に病死し、政局は安定しないので、段張作霖は北京に入り、自ら大元帥となりました(大正十五年四月)。かくて

國民政府の成立

孫文の死後、その主唱した民族、民生、民權の三



蔣 介 石

民主義を宣傳して人望を得た南方の總司令蔣介石は廣東を出發して、北伐軍を進め、つひに南京に國民政府を建てました(昭和四年四月)。

これより北方の張作霖は漸く不利になり

孫文の永眠

段執政退職

大元帥張作霖

三民主義

蔣介石の北伐

國民政府の成立



孫文とその夫人

孫文は大正十四年三月十二日北平のロクフラー病院に於て永眠した。最近世の支那史上に名高い彼の名聲は其歿後ますますあらはれて、多数の支那人に追慕崇拜されて居る。其夫人も其遺志を奉じて國事に盡力しつつあるといふ。

張學良

北京より退いて奉天に入らんとして、不慮の死をとげ、その子張學良は東三省保安總司令となりましたが、つひに國民政府に服従しました。

第十二章 滿洲帝國

● 滿洲事變の發生 日露戦役の後、我が國は巨額の資本を用ひ、多大の努力を以て滿洲の開発に力めました。これがために文化の恩澤は漸く滿洲諸方面に及び、支那は動亂相つぐも、滿洲は平和の別天地のやうでありました。然るに支那人の一部は大正四年の日支條約締結以來、我が國を誤解して、しばしば、排日運動を行ひました。張學良が滿洲の支配者となるや、我が特殊權益を侵害し、我が國の經濟的基礎をくつがへさうとしました。

かくて昭和六年九月十八日、張學良の兵が滿鐵線路を爆破するや、

滿洲は平和の別天地

九月十八日

我が皇軍は自衛のため斷然立つて張氏軍と戦ひ、南滿の要地を占領して、皇軍の向ふ所敵なき状となりました。

この間南京の國民政府は歐洲諸國によつて、國際聯盟に於ける我が國の地位を不利ならしめようと試みましたが、正義によつて行動する我が國は、少しも動じませんでした。

● 滿洲國の成立と承認 滿洲三千萬の人民は、久しく張氏父子の壓制に苦しんでゐましたが、張氏の勢力が完全に滿洲より一掃されたので、獨立の機運はこゝに熟し、さきに退位した宣統帝を執政に推戴し、東北四省を合して、新に滿洲國を建て、昭和七年に大同といふ年號を定め、新京(もとの長春)を首府として、新國家は洋々たる新生の第一歩をふみ出しました。

我が國は世界の國々にさきだつてこの滿洲國を承認し、同時に日滿議定書を取りかはして、日滿兩國は共同して、國防に當り、東洋の

溥儀執政推戴

滿洲國の建設

大同元年は昭和七年に當る

*昭和七年九月十五日

日・滿兩國の共同



新國家滿洲國の旗



配 政 執



儀 博 政 執 國 洲 滿



督 奉 郵 理 總 務 國 洲 滿



全 國 郵 政 總 局 總 長

平和に盡力しようとして固く盟約しました。

現
滿洲國の帝制實
秩父宮御渡滿

滿洲國皇帝答禮
御訪日

日・滿不可分關
係

③ 滿洲帝國の發展 その後、滿洲國はいよ／＼健全に發展し、大同

三年(昭和九年)三月、帝制を採用し、執政は新に滿洲國皇帝となり、康德といふ新年號をたてました。秩父宮雍仁親王は、天皇の御名代として滿洲國に御渡りになり、したしく祝賀の意を表はされました。

④ 滿洲國皇帝陛下御訪日 滿洲國皇帝には、建國以來日本の援助に感激され、御訪日の思召深くあらせられました。昭和十年四月に至り、それが實現されました。御還りの後、日滿一心一體の大詔書も發布されて、日滿不可分の關係はいよ／＼かたくなりました。

⑤ 駐日滿洲國大使館の成立 日本は滿洲國に對し、初めより大使を派遣してゐましたが、滿洲國は日本に公使館を置いてゐました。これは建國の際準備が至らなかつたためでありました。昭和十年五月に至り、いよ／＼大使館に昇格の事が確定しました。

昭和十年三月二十三日滿・ソ兩國代表正式調印

滿洲の王道政治

●北滿鐵道讓受 ソヴェエトロシア政府から、北滿鐵道の讓渡を申出で、我が外務省は之を滿洲國に傳へ、滿ソ兩國代表は東京に於て會議を行ひ、昭和八年以後、三箇年に亙る交渉の結果、ついに成功したのは、滿洲國のために賀すべきことであります。

●列國の滿洲國承認 滿洲國は、その建國以來、王道樂土を標榜し、着々内政を整備するとともに、外は列國との親善をはかり、國際的地位の向上に努めて來ましたため、對外的地位も次第に重きを加へ、既に同國を承認した我が國の外、獨逸、伊太利、西班牙及び中華民國其他の世界諸國も、相ついで同國を承認し、同國と列國との通商親善も、ますます緊密の度を加へることとなりました。

滿洲國皇帝再度の御訪日

●滿洲國の國本奠定 昭和十五年、我が日本は、紀元二千六百年の佳き年をお迎へ申しました。同年六月、滿洲國皇帝は再び御來朝になり、天皇陛下に紀元二千六百年のお祝ひを御申し述べになり、つ

いで皇大神宮、橿原神宮、伏見桃山陵などに御參拜になつて、歸國せられました。

建國神廟創建

皇帝はかね／＼我が皇室の御德をお慕ひになり、天皇陛下と同じ御精神を以て、滿洲國を治めたい旨を國民に御告げになつておられました。が、再度の御訪日に、皇大神宮に參拜して御歸國になると、天照大神を奉祀する建國神廟を帝宮内に御創建になり、日夜大神の御神德を奉體して、政を行はせられることとなり、滿洲國の國本は、明に我が日本の惟神の道に奠り、國教は忠孝の教に張ることになりました。これに關する詔書、康德七年即ち昭和十五年、七月十五日御發布は、國本奠定の詔書といひ、滿洲國皇帝の天照大神の御神德と、天皇陛下の御保佑とに對する崇敬感得の信念は、實に甚だ深厚なるものと拜します。

國本奠定の詔書

第十三章 現代の東洋

● 蔣政權の支那 中華民國は、南京を首都とし蔣介石の勢力によつて統治されることとなりましたが、いろくの内紛があつて、未だ完全な統一國と見なし難いやうでありました。

思想・學術界の近狀

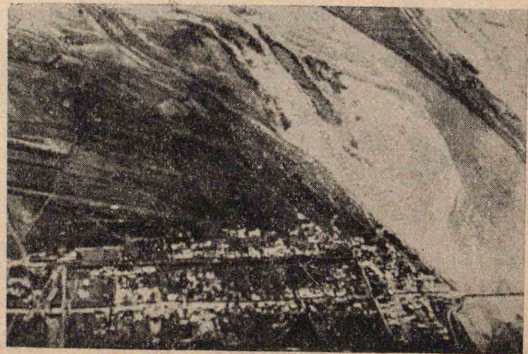
思想界・學術界の近狀を一言すれば、或は黎明期的思想あり、或は新文化的運動あり、或は新舊思想の對立などがあります。近代の學者としては、梁啓超^{リヤウケイテウ}、羅振玉、胡適などが有名であります。

誤れる遠交近攻政策

● 支那事變 蔣介石は南京に國民政府を建てた後、日滿支三國協同して、東洋永遠の平和をうち建てようとする我が國の誠意を解せず、誤れる遠交近攻政策を取り、我が國の進展を喜ばぬ西洋諸國の勢力に依存し、排日抗日を以て、自國民統合の手段とし、甚しきは侮日の行爲をさへ敢てするに至りましたが、昭和十二年七月七日

蘆溝橋北方の不法射撃

北京南方の蘆溝橋北方に於て、支那軍は、我が北支駐屯軍に對して、不法射撃を加へるの暴舉に出ましたので、寛大隱忍を重ねました皇軍も、つひに決然として之に應戰することとなりました。北支のみならず、中支の上海に於ても、同年八月、排日侮日の暴舉を起しましたので、我が國は支那軍の暴戾を膺懲し、南京政府の反省を促すため、從來堅持して來た紛争不擴大方針を一變し、斷然として起ち、天に代つて不義を討つるの聖戰に従事することとなりました。これが即ち支那事變の原由の大略であります。



蘆溝橋

皇軍の忠勇義烈

皇軍の忠勇義烈な作戦と、神速果敢な進撃とは、世界戦史にも稀に見る所でありまして、陸海空の皇軍は北支、中支、南支、到る處に勝利

を占めました。而して北支制壓によつて、蒙疆自治政府が成立し、徳王がつひに蒙疆政府の主席に就任し、我が國との絶對協力を宣言し、南支戰勝の餘威は、一方海南島の上陸占據となり、他の一方は佛領印度支那にも、皇軍の進駐を見ることとなりました。

●我が國の正義 斯のやうに皇軍は正々堂々としてその武威を輝かすとともに、我が國は平和的文化工作にも努力し、且つ全體の大方針は、日支共存共榮、東亞復興の共同目標に向つて邁進し、善隣友好、共同防共、經濟提携を内容とする大東亞新秩序を建設することになり、決して侵略を事とするものではありません。この新秩序の建設は、日滿支三國相携へ、政治・經濟・文化等各般に互り、互助連環の親密關係を確立するを以て國是としてゐることは、我等國民として心得て置くべきことであります。

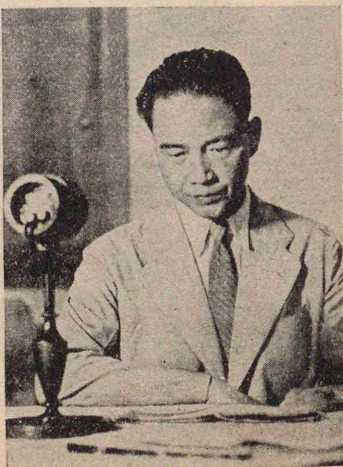
●和平への道 蔣介石は南京陥落の後、つひに遠く重慶に退却し

大東亞新秩序の建設

新しい中華國民政府

汪精衛の努力

依然として外國の勢力に依存して抗日を繼續しましたが、孫文の遺志を守る汪精衛は蔣の政策に反對し、つひに重慶を脱出して、和平建國、日支提携の正道に向つて力を盡してゐましたが、昭和十五年三月三十日には、汪氏を主席とする新しい中華國民政府が南京に成立しました。



汪 精 衛

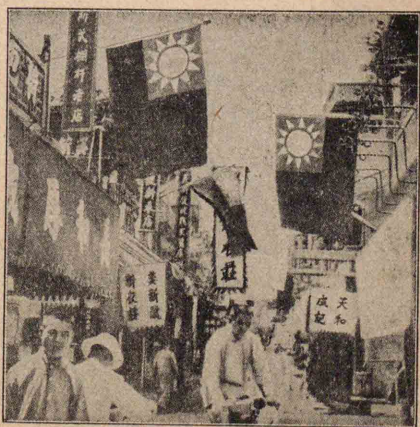
●支那の古と今 あゝ、支那は萬里國土を闢き、世を閱すること幾千年、文化早く開け、聖賢英雄も多く出ました。試みに世界の歴史を見れば、盛衰強弱、皆それ〴〵原因があります。如何に地廣く人衆しとて徳なく力なければ、如何して治を致し盛を望むことが出来ませう。支那は今や幸ひにして汪精衛の努力により新なる發足をな

印度政廳移轉

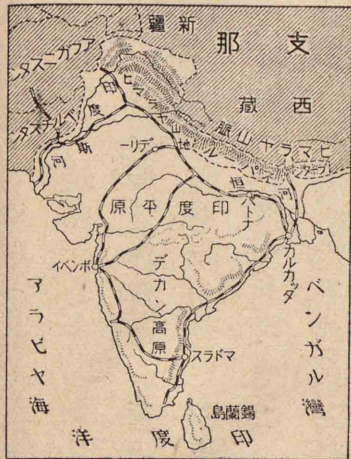
印度の自治運動

し、我が國と固く結んで東亞新秩序の建設に邁進することになりました。

⑥ 印度の近狀 次に英領印度に於ては、明治四十四年(西紀一九一一年)印度總督政廳所在地をカルカッタよりデリーに遷し、その統治は益々堅實となりました。大約三十年前頃より一部の士人の間に自



旗日白天青



圖略度印

治及び國産使用の説を唱へるものもありましたが、その傾向はや々穩和となり、且つ印度に對する英國政府の統治の方針は依然として確定不變であるといひます。

⑦ 歐米諸國と東洋・南洋 歐米諸國

の東洋と南洋とに於ける勢力はその最も盛であつた時にくらべては、や々衰へたやうであります。が、なほ頗る盛なものがあり、英國は印度・濠洲及びその他の多くの領土を有し、ソヴェト・ロシアの中には西比利亞及び中央亞細亞の大地方あり、佛國も印度支那方面に、和蘭もジャバ等の南洋に、それぞれ領土を有し、葡萄牙の如き小國も印度のゴア・ダマン・ヂウ及び南支那の澳門を領し、北米合衆國もハワイを領し、フィリピン群島をその勢力範圍としてゐます。東洋に關して、亞細亞大陸方面及び南洋方面に對して、大東亞の共榮を目的とする我が國民はこれ等の實



人偉二の度印
ルーゴタージンガ

情について深く思はなければなるまいと考へます。

第十四章 東洋史上より觀たる我が國の

使命と國民の覺悟

日本國內外の盡力

國民の覺悟 明治維新以來、我が日本帝國は、内は制度文物の進歩發展を圖ると共に、外は強國ロシアの大軍を擊破し、また韓國を併合して東洋平和のために盡力し、更に進んで世界大戰に参加して、世界の平和に協力した事などによつて、その國際的地位は大いに向上して、東洋に於ける我が國の名實はますます、高まりました。されば日本國民はいよく、奮勵自重して、忠君愛國の至誠を盡さなければなりません。

忠君愛國の至誠

中華民國や印度は、過去の我が國の文物發達に益したことの多大であつたことを回顧すれば、その現狀に對して、無關心であり得ないのみならず、中華民國や印度や滿洲國の國情の安定と否とは、實に東洋乃至世界の平和に關係する所が甚だ深いものがあります。

不幸にして支那大陸には今なほ蔣政權は東亞民族の發展を好まぬ外國の策動に陥り、奧地に於て抗戰を續けてをり、南方の方面でも東亞の共存共榮を妨害しようとする英米の諸國は事ごとに我が國を壓迫してをります。かやうな現狀を思へば私共は心より東亞諸國の安定を希望し、その發展の實を擧げることのためには、あらゆる努力を惜まぬ覺悟を持たなければなりません。

今や我が國は、今上天皇の御稜威の下に、國運いよく、進展し、大東亞の新たなる秩序の建設に邁進して、世界平和のために重大なる使命を擔ふやうになりました。

されば我々國民は、世界無比の國體の尊嚴をよく、辨へ、忠誠なる祖先にもまさる正大なる日本臣民となり、境遇地位に應じて、各

自の業に勵み、億兆一心となり、以て皇運の隆昌を翼贊し奉らなければなりません。

女子教育 新編東洋史終

上古史摘要年表

(大體第一章より第三章に至るまで)

(本系の左傍に括弧を附して、匈奴と記せるは、匈奴は秦より後漢に互り、史上にあらはれたる事を示すものなり)

太古…黃帝…帝堯—帝舜—夏—殷—周—秦—前漢—新—後漢
匈奴

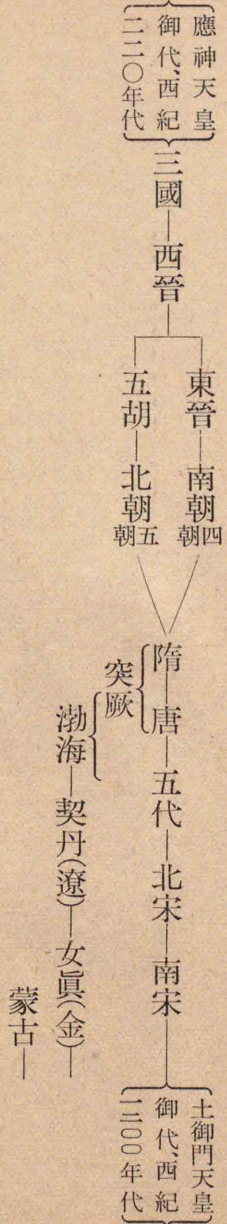
上古史摘要年表 (本系の左傍に括弧を附して、匈奴と記せるは、匈奴は秦より後漢に互り、史上にあらはれたる事を示すものなり)
 (大體第一章より第三章に至るまで)
 太古…黄帝…帝堯—帝舜—夏—殷—周—秦—前漢—新—後漢
 匈奴

年	重要事蹟	年	重要事蹟
皇紀西紀		皇紀西紀	
前1000頃	黄帝君臨	前475頃	秦亡ぶ。秦の時文字の改良及び筆の精製あり。
前900頃	帝堯即位	前475頃	項羽自殺。漢の高祖の天下統一統。
前800頃	帝舜即位	前475頃	衛滿古朝鮮王となる。
前700頃	夏興る	前475頃	漢文帝即位元年
前600頃	夏亡び殷興る	前475頃	漢武帝即位元年
前500頃	殷亡び周興る	前475頃	張騫西域より還る。東西文物の交換漸く起る。
前475頃	殷の箕子古朝鮮の王となる	前475頃	武帝古朝鮮を平ぐ
前400頃	周の東遷春秋時代始まる	前475頃	司馬遷の史記成る
前300頃	齊の桓公の霸業全盛	前475頃	新羅の建國
前200頃	釋迦生まる	前475頃	高句麗の建國
前100頃	孔子生まる	前475頃	百濟の建國
前70頃	釋迦死す	前475頃	王莽の篡立
前60頃	孔子死す	前475頃	後漢の光武帝即位元年
前50頃	孟子生まる	前475頃	大月氏のカニシカ王即位
前475頃	阿育王マガダ國王となる	前475頃	佛教始めて支那に傳來す
前400頃	秦の天下統一統	前475頃	班超西域都護となる
前300頃	秦の蒙恬匈奴を征す。長城増築起工	前475頃	赤壁の戦
前200頃		前475頃	魏の曹丕篡立して後漢亡ぶ。後漢の時紙の發明あり
前100頃		前475頃	
前50頃		前475頃	
前0頃		前475頃	
皇紀西紀		皇紀西紀	
前100頃		前475頃	
前50頃		前475頃	
前0頃		前475頃	
皇紀西紀		皇紀西紀	
前100頃		前475頃	
前50頃		前475頃	
前0頃		前475頃	

中古史摘要年表

(大體第四章より第六章に至るまで)

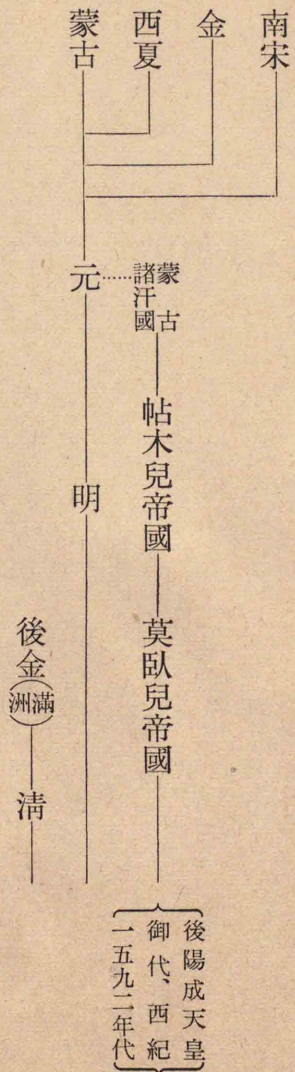
(本系の左傍に括弧を附して、突厥及び渤海などと記せるは、是等の諸種族の史上にあらはれし時代を示すものなること上古史年表に記せしが如し)



年	皇紀	西紀	重	要	事	蹟
應神	八二	三三	蜀漢の劉備帝を稱す			
同	八九	三九	吳の孫權帝を稱す			
同	八四	三四	諸葛亮(孔明)死す			
同	九三	四三	蜀漢亡ぶ			
同	九五	四五	司馬炎篡立して魏亡ぶ			
同	九〇	四〇	西晉の武帝(司馬炎)の天下一統			
仁德	九六	三六	西晉亡ぶ			
同	九七	三七	東晉興る			
同	一〇四	四三	淝水の戰			
允恭	一〇九	四九	天下宋・魏の南北兩朝となる			
武烈	一一六	五三	梁の武帝即位元年			
欽明	一一三	五〇	百濟佛教を我が國に傳ふ			
同	一一三	五〇	ムハメット アラビヤに生る			
崇峻	一一四	五一	隋の天下一統			
推古	一一五	五二	隋の煬帝即位元年			
同	一一七	五四	小野妹子、隋に使す、日本支那交通の始			
同	一一八	五五	隋亡び唐興る			
同	一一七	五四	唐の太宗貞觀元年			
舒明	一一九	五六	唐の僧玄奘印度にゆく			
同	一二〇	五七	日本遣唐使の始			
同	一二五	六二	唐の太宗東突厥を滅す			
同	一二五	六二	景教唐に入る			
齊明	一三七	六七	唐の高宗西突厥を破る			
天智	一三三	七三	唐の高宗百濟を滅す			
同	一三六	七六	唐の高宗高句麗を滅す			
持統	一三五	七五	則天武后の篡立			
元明	一三七	七三	唐の玄宗開元元年			
同	一四五	八一	渤海建國の始			
孝謙	一四五	八一	安祿山反す			
宇多	一五四	八〇	日本遣唐使の廢止			
醍醐	一五七	八三	唐亡ぶ			
同	一五六	八二	契丹の太祖即位す			
同	一五六	八二	契丹、渤海國を滅す			
村上	一六〇	八六	宋の太祖即位元年、宋初以後印刷の術ますく發展す			
圓融	一六九	九五	宋の太宗天下を一統す			
後三條	一七九	一〇五	宋の王安石新法を行ふ			
鳥羽	一七五	一〇一	金(女眞)の太祖の元年			
崇徳	一七五	一〇一	金・宋連合して遼を滅す			
同	一七七	一〇三	北宋亡び、南宋の高宗即位す			
同	一八一	一四七	宋・金の和			
二條	一八三	一四九	蒙古の鐵木眞(成吉思汗)生る			
土御門源賴家	一八〇	一四六	南宋の朱子卒す			

近古史摘要年表

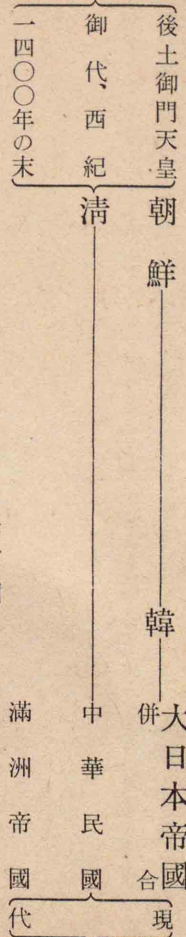
(大體第七章より第八章に至るまで)



年	皇紀	代	西紀	重	要	事	蹟	
土御門源實朝	一八六	二〇六	一三六	蒙古の太祖(成吉思汗)即位元年	後村上長義滿	二〇六	一三六	明興り元亡ぶ。明の太祖即位元年
後堀河北條義時	一八四	二〇四	一三四	蒙古軍阿羅思に侵入す	同慶	二〇四	一三四	帖木兒中亞を平定す
北條泰時	一八四	二〇四	一三四	金の滅亡(ロシヤ)	同小松	二〇三	一三三	朝鮮の太祖(李成桂)即位元年
同	一八六	二〇六	一三六	拔都の西征	同	二〇三	一四三	明の成祖(永樂帝)即位
龜山時宗	一五〇	二六〇	一七〇	元の世祖即位元年	同義持	二〇五	一四五	鄭和の遠洋航海
同	一五三	二六三	一七三	蒙古國號をたてて元といふ	同義原	二〇六	一五六	パベル莫臥兒帝國を興す
同	一五五	二六五	一七五	マルコポーロ元に来る	同義晴	二〇六	一五六	明の王陽明死す
後宇多	一五九	二七〇	一八〇	南宋亡ぶ	同後奈良	二〇六	一五六	此頃韃靼屢明に入寇す
同	一五九	二七〇	一八〇	元軍我が國に入寇して大敗す(弘安の役)	同義輝	二〇七	一五七	我が國朝鮮をうつ
同	一五九	二七〇	一八〇		同後陽成	二〇七	一五七	
同	一五九	二七〇	一八〇		豊臣秀次	二〇七	一五七	

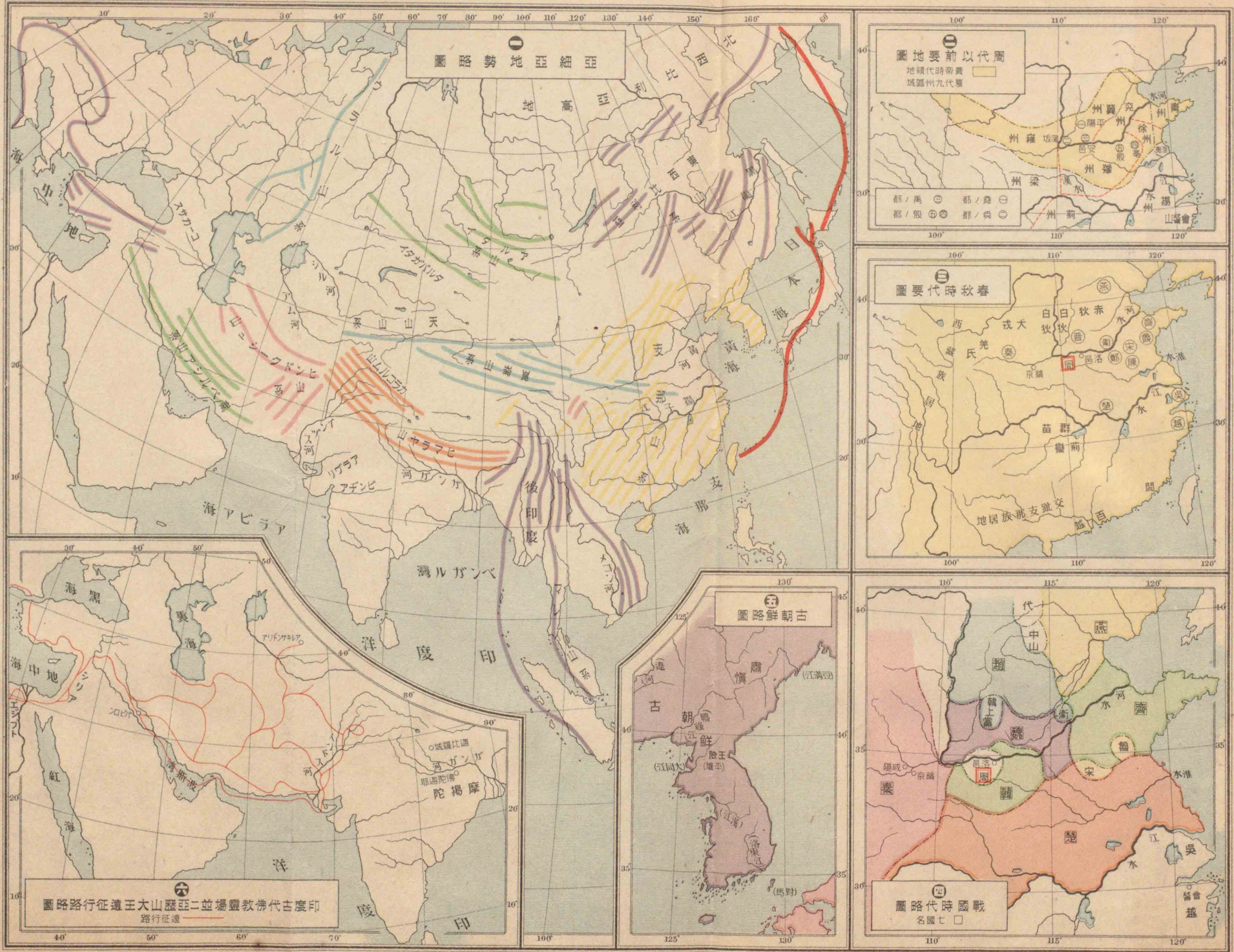
近世史摘要年表

(大體第九章より第十四章に至るまで)



年	皇紀	西紀	重 要 事 蹟	年	皇紀	西紀	重 要 事 蹟
後土御門	二五九	一四九	葡萄牙人印度に達す	明治四	二五九	一八七	清・露の伊犁問題定る
足利義澄	二五八	一四八	葡萄牙人澳門に據る	同 一〇	二五八	一八七	アフガニスタン方面の英・露境界問題定る
後奈良	二五七	一四七	西班牙人フィリピン群島を占領す	同 九	二五七	一八七	日・清戦役起る
同 義輝	二五五	一四五	伊太利人リマ竇支那に来る	同 八	二五五	一八七	日・清下ノ關係約成る
正親町	二五四	一四四	滿洲のヌルハチ(清の太祖)兵を起す	同 七	二五四	一八七	朝鮮國號を韓と改む
織田信長	二四三	一五三	英人東印度會社を建つ	同 六	二四三	一八七	獨・露・英の三國清國の港灣を借る
同 同	二四二	一五二	滿洲のヌルハチ後金の皇帝と稱す	同 五	二四二	一八九	佛國の廣州灣租借○清國改革派の失敗
後陽成	二四一	一五一	蘭人臺灣に據る	同 四	二四一	一八〇	義和團の亂○東西八列國の北京占領○露國滿洲を占領す
豐臣秀頼	二四〇	一五〇	後金國號を清と改む	同 三	二四〇	一八〇	清・列國と和し北清事件局を結ぶ
後水尾	二三九	一四九	清の太宗朝鮮を降す	同 二	二三九	一八〇	日・露戦役起る
徳川秀忠	二三八	一四八	明亡ぶ	同 一	二三八	一八〇	日・露の講和條約成る○日・韓協約成り始めて統監府を韓國に置く
同 同	二三七	一四七	明の鄭成功臺灣に據る	大正二	二三七	一九〇	清國立憲政體採用の上諭發布
同 同	二三六	一四六	清の聖祖康熙元年	同 一	二三六	一九〇	清の徳宗光緒帝及び西太后の崩殂
同 同	二三五	一四五	臺灣清の有となる	同 〇	二三五	一九〇	日本の韓國併合
同 同	二三四	一四四	清・露二國の尼布楚條約締結	同 〇	二三四	一九〇	支那の革命戦争起る
同 同	二三三	一四三	外蒙古・青海等清の有となる	同 〇	二三三	一九〇	清の滅亡
同 同	二三二	一四二	清、西藏を平ぐ	同 〇	二三二	一九〇	中華民國正式成立○列國承認
同 同	二三一	一四一	清の高宗乾隆元年	同 〇	二三一	一九〇	日・支條約締結
同 同	二三〇	一四〇	清の高宗天山南北路を平定す	同 〇	二三〇	一九〇	日・支條約締結
同 同	二二九	一三九	暹羅、清の高宗に朝貢す	同 〇	二二九	一九〇	袁總統死し黎元洪之に代る
同 同	二二八	一三八	安南、清の高宗に朝貢す	同 〇	二二八	一九〇	馮國璋大總統となる
同 同	二二七	一三七	阿片戦役起る	同 〇	二二七	一九〇	徐世昌大總統となる
同 同	二二六	一三六	清・英二國の南京條約締結	同 〇	二二六	一九〇	孫文南方政府の大總統となる
同 同	二二五	一三五	長髮賊起る	同 〇	二二五	一九〇	山東問題解決す
同 同	二二四	一三四	莫臥兒帝國亡ぶ	同 〇	二二四	一九〇	曹錕大總統となる
同 同	二二三	一三三	露國黒龍江北を取る	同 〇	二三三	一九〇	奉直戦争起る○段祺瑞臨時執政となる
同 同	二二二	一三二	清と英・佛二國の北京條約締結○露國烏蘇里江東を取る	同 〇	二二二	一九〇	段執政退職す
同 同	二二一	一三一	佛國交趾支那を得	同 〇	二二一	一九〇	蔣介石の北伐軍起る
同 同	二二〇	一三〇	朝鮮王李熙(後の李太王)即位元年○長髮賊の亂平ぐ	同 〇	二二〇	一九〇	國民政府南京に成立す
同 同	二一九	一二九	日・清修好條約締結	同 〇	二一九	一九〇	滿洲事變起る
同 同	二一八	一二八	露國樺太を得	同 〇	二一八	一九〇	滿洲國我が國より承認さる
同 同	二一七	一二七	日・韓通商條約成る	同 〇	二一七	一九〇	滿洲國帝制を實現し康德元年と改む
同 同	二一六	一二六	英國女皇印度女皇を兼ねぬ	同 〇	二一六	一九〇	滿洲帝國皇帝日本御來訪
同 同	二一五	一二五	崇厚露國と伊犁還付條約を決す	同 〇	二一五	一九〇	北滿鐵道讓渡
同 同	二一四	一二四		同 〇	二一四	一九〇	日・支大使館成立
同 同	二一三	一二三		同 〇	二一三	一九〇	支那事變起る

圖一第



圖二第



圖三第

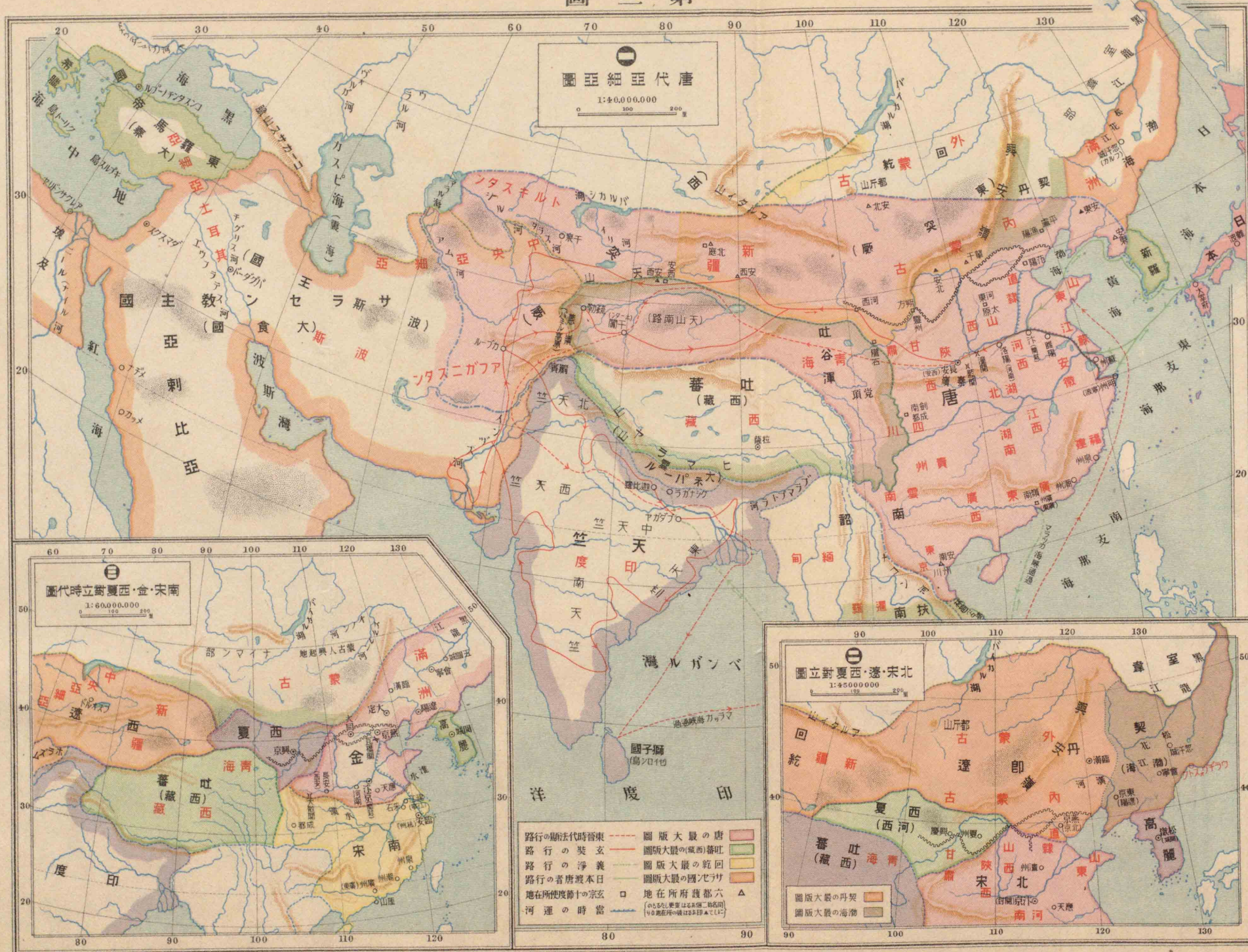


圖 四 第



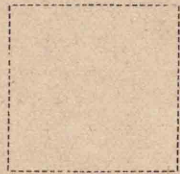
圖五第



圖六第



昭和十二年七月二十九日
 昭和十三年八月十四日
 昭和十四年十一月五日
 昭和十六年十一月三十日
 印刷發行
 再版發行
 修正版發行
 修正版發行



著者

中山久郎

發行者

東京市麴町區飯田町二丁目二十番地
 中等學校教科書株式會社

印刷者

東京市蒲田區仲六郷一丁目五番地
 株式會社 三省堂蒲田工場
 代表者 岸本玄男

發行所

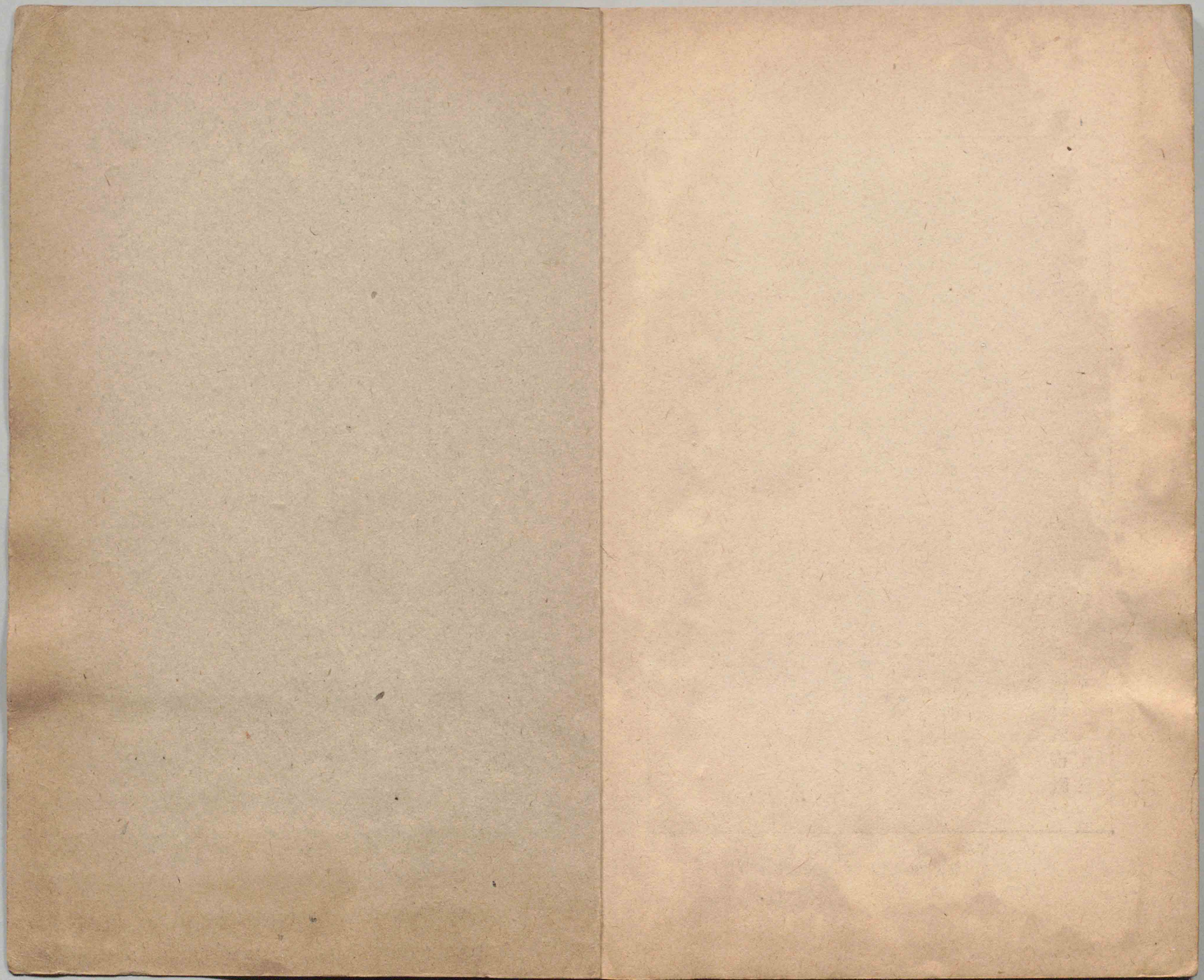
東京市麴町區飯田町二丁目二十番地
 中等學校教科書株式會社
 日本出版文化協會會員番號 一一七五二二

女子教育新編 東洋史
 定價金 八十五錢



(略名) 三省中山女東史

配給元 日本出版配給株式會社
 東京市神田區淡路町二ノ九



庫
41
061

広島大学図書

2000071961

